

社会教育による地域の教育力強化プロジェクト

学校と地域の総合的な活性化

朝日学区の郷土教育と郷土資源



(高山市朝日学区・日和田地区の石仏)

岐阜大学

朝日中学校区活性化協議会 (岐阜県高山市)

はじめに

平成 23 年度、高山市は文部科学省（生涯学習政策局）より「学校と地域の活性化」をテーマとする「社会教育による地域の教育力強化プロジェクト」研究の委託を受けた。その委託研究の内容は、地域力の総合的向上モデル構築実証事業、廃校・廃園活用プロジェクト実証事業や地域既存文化の育成・発展実証事業に及ぶ。

本書では、そのうち岐阜大学が再委託を受けた地域力の総合的向上モデル構築実証事業について、その成果を報告することとする。

この実証事業では、農山村の小規模校の活性化が同時に地域（学区）の活性化に連動する可能性をもつプランとして郷土教育事業を想定し、その事業導入の方法と課題を検討した。

本書は、大きく二部に分かれている。第 1 部では、郷土教育の方法と課題の検討を行った。第 2 部では、事例として高山市立朝日小学校の郷土教育推進のための郷土資源の分析を行った。第 3 部で、郷土教育の資料の解題と解析を行った。

詳細には、第 1 部では、農山村小規模校の学校の活性化と地域の活性化においてなぜ郷土教育が有効か。さらに、教育政策上日本の学校教育に郷土教育の導入が求められている背景・状況を検討した上で、実際に朝日小学校の郷土教育の課題を検討し、その郷土教育推進の内容と方向を考察した。

第 2 部では、実際に現在朝日小学校の郷土教育の授業で教材化されている自然資源・伝統文化資源・社会資源の考察を行った。この考察は、それぞれの郷土資源に直接関わり、授業に参加、支援していただいている朝日学区の住民の方々をお願いした。

学校と地域の活性化は、現在全国的には学校運営協議会や学校地域支援本部事業など、制度（システム）の導入が主流となっている。しかし、本来の学校と地域の活性化を同時に進行させ、両者が連動する方法は、やはり日常の学校教育の実践の次元にあると考える。

ここでは、特に、高山市のような農山村小規模校が多い地方において、郷土教育事業の推進が学校のみならず地域の活性化に働く有効な方法であるとして、その可能性を検討した。

平成 24 年 2 月 25 日

篠原 清昭

(岐阜大学大学院教育学研究科教授)

過疎化の中に故郷を思う

清水里都

(高山市立朝日中学校 3 年生)

(しまった。明日、コンパスがいるんやった。) 気がついたのは夜 9 時をまわっていた。「どうしてもっと早く言わなんだの。」と、また母を怒らせてしまった。そう怒りながらも母は往復 1 時間かけて買ってきてくれた。そうなのだ。僕が住む町にはコンビニがない。2 年ほど前に閉店してしまった。おそらく採算が合わなかったのだろう。その便利さを覚えているがために、母に叱られた後は特にその不便さが身にしみる。コンビニがないなんて、なんという田舎に住んでいるのだろうと嫌になる。恥ずかしさもある。

市内の高校へ通う兄は、帰りのバスを 1 本逃すと、4 時間も暇をつぶさなくてはならない。田舎の不便さをしみじみ感じるという。

僕の住む町は人口の減少に歯止めがかからない。最も多かった昭和 22 年頃と比べると 3,000 人も減少し、現在は 1,890 人である。かつてはダム建設が盛んで多くの作業員が移り住み、映画館がにぎわうなど町は華やかだったと聞いた。ダムが完成した後は大きな産業はなく、今ではほとんどの若者が高校を卒業すると家を離れる傾向がある。今年の 30 人近い新成人の内、地元に残っているのが 2 人と聞いて驚いた。僕の 3 年後をイメージした時、やはり家を離れて進学の道を選んでいると思う。不便な田舎暮らしではなく、華やかな都会での生活に憧れがあるのだ。

隣町の過疎化はもっと深刻である。小中学校は閉校となり子供達は僕の住む町へバスで通っている。統合して 6 年が経過した。統合の初日のバスから降りてきた彼らの顔は、緊張と不安な思いを笑顔で必死に隠していたように見えたことを今でも覚えている。

「そこに通い慣れた学校があるのに通り過ぎて行くのは複雑な感じだったな。」と、すっかり仲良くなった友達は当時の思いを話してくれた。統合を機に町を離れた友達もいたという。町境以上に見えない大きな壁を乗り越えてきた彼らだからこそ、生まれ育った故郷を思う気持ちは人一倍であると思う。

そんな思いにふと気がついた時、自分は生まれた故郷を批判し、便利さや華やかさばかりを求めて人生を進んでいいのかと考える。先日出かけた修学旅行では、いかにも都会という神戸や広島等の街のにぎやかさに触れた。こんな町で暮らしてみたいと思った。3 日間の研修を終え地元の駅に降り立った時、沢山の保護者や先生方が柵から身を乗り出すように笑顔で迎えてくれているのを見て、あー僕の故郷だ、大切な人が帰りを待っていてくれる故郷だと感じ目頭が熱くなった。次の日ふと外を眺めた時、新緑が目にも染みだした。今まであまりに近すぎて圧迫感さえ感じていた山々を愛おしく感じた。こんなに温かく自分を包

んでくれる故郷が、過疎化により空き家が増え、田畑や山々が荒れ、伝統の祭りや行事ができなくなるなど次第に寂れていくのをただ見過ごしていいのかとふと思った。地域の人達は随分前から真剣に考え取り組んでいる。

自分にできることは何だろう。自分は住み続けると断言できるだろうか。僕も含め仲間の多くは故郷を離れて生活することになるかもしれない。住み続けることだけが故郷を守ることではないとも思う。離れていても故郷のためにできることはあるはずだ。自分自身にそして仲間に伝えたい。故郷のことをもっと知ろう。どこにいても忘れないでいよう。故郷で育ったことを誇りに思おう。心から愛そう。世の中にその良さを発信しよう。そして時々戻って、故郷を守ってくれている家族や人々に感謝の気持ちを伝えよう。今後さらに過疎化が進み益々不便さを実感するだろう。でも僕は思う。コンビニがないなら持ち物を早めに確認するのだ。バスに乗り遅れたら笑い飛ばして町を探検しよう。物理的な不便さは心の豊かさで打ち消せばいいのだ。

そうだ。今僕は故郷朝日町が大好きだ。

(第 33 回少年の主張全国大会 奨励賞)

目次

はじめに	
作文	
第Ⅰ部 郷土教育の方法と課題	
第1章 郷土教育の導入と農山村小規模校の活性化	1
第2章 郷土教育の推進と郷土教育計画づくり-朝日小学校を例として-	11
第Ⅱ部 郷土資源の考察と学習価値	
第3章 子の原高原の自然資源と学習	31
第4章 「うま辛王」の社会資源と学習	37
第5章 朝日特産物「よもぎ」の社会資源と学習	49
第6章 日和田マップ	54
第7章 タカネコーンの社会資源と学習	60
第8章 日和田の石仏めぐり	66
第9章 米づくりの社会資源と学習	78
第10章 わらび粉づくりの社会資源と学習	82
第11章 天狗まつりの伝統文化資源と学習	88
第12章 「野麦を越えた女工たち」の社会資源と学習	91
第Ⅲ部 郷土教育の資料解題	
第13章 郷土教育の資料と利用	99
おわりに	111
執筆者一覧	112

第 I 部 郷土教育の方法と課題

第1章 郷土教育の導入と農山村小規模校の活性化

現在、日本のすべての学校に日本人としてのアイデンティティの育成が求められている。それは、これからの国際化に対応するグローバルな人間の育成には、諸外国の異文化を理解する前提として、自国の伝統・文化の良さに気づかせ、日本人であることの価値や意義を持たなくてはならないからである。自国の伝統・文化を理解し、自らが日本人であることの自覚を持つことによって初めてグローバル化された現代社会の社会人になることができるのである。

このとき、「日本人としてのアイデンティティの育成」は方法としては国家による国民形成すなわち公教育事業としての学校教育に期待される。それは、「日本国民」は生まれながらにして「日本国民」であるわけではなく、「日本国民」になるのであって、そこに「日本国民」を育成するという学校教育の役割があることをいう。

そのため、国は教育基本法の改正により新たに「我が国と郷土を愛する」日本人としての態度（資質）の育成を教育目標（第2条）の一つとして規定し、また学校教育法（第21条の3）に「我が国と郷土の現状と歴史について正しい理解」を求める新たな義務教育の目標を規定した。さらに、国は学校の編成する教育課程の「手引き」としての学習指導要領の改訂により、「先人の生き方や伝統と文化」「愛郷心」（道徳）、「古典等の指導の充実」（国語）「我が国の伝統と文化に関する歴史学習の充実」（社会）、「和楽器」（音楽）、「我が国の美術文化」（美術）、「武道の必修化」（体育）など、いわゆる郷土教育の推進を内容とする教育づくりを強く学校に求めている。

しかし、現状では全国的にみて学校による郷土教育の導入はそれほど活発ではない。今後、生活圏としての地域に近い学区をもつ小学校や中学校を中心に郷土教育が推進される必要がある。このとき、都市の学校と異なり農山村の学校は郷土教育を効果的に導入できる可能性があると考えられる。実際、農山村の学校はその学区に豊かな郷土資源を保有している。その郷土資源には、自然資源（山や川など）、祭りや踊りさらに民謡などの伝統文化資源、さらに農業を中心とする地場産業などの経済資源がある。さらに、また自然村と言われた時代から村落共同体的な結びつきが強く、ヒューマン・リソースとも言える強い人間関係力を保有している。このヒューマン・リソースは、地域との連携を方法とする郷土教育の実践を支援する大きな人的資源となる。それは、郷土教育が地域を「教室」「教材」としてそこに住む住民を「先生」とする取り組みであることから、大きな資源となる。

一方、農山村の学校は、人口減少による限界集落化と地場産業の停滞による過疎化を原因として、学区再編と学校統廃合が急速に進行する中で小規模校化し、一定の教育の活性化が求められるという課題をもつ。それは、農山村の小規模校としての特色ある学校づく

りが求められていることを意味する。以上のことを考えれば、今後農山村の小規模校にとって郷土教育の導入は大きな可能性をもつといえよう。

ここでは、以上のような意味において、農山村の小規模校の学校の活性化のための特色ある学校づくりとして、郷土教育を取り上げ、その導入の方法と課題について検討することとする。詳細には、第一に農山村の小規模校の活性化の方法としてなぜ郷土教育の導入が有効か。第二に郷土教育が近年の教育改革の中でどのような政策意図を持つのか。第三に郷土教育を構成するカリキュラムの基本原理・価値は何であるかを考察する。

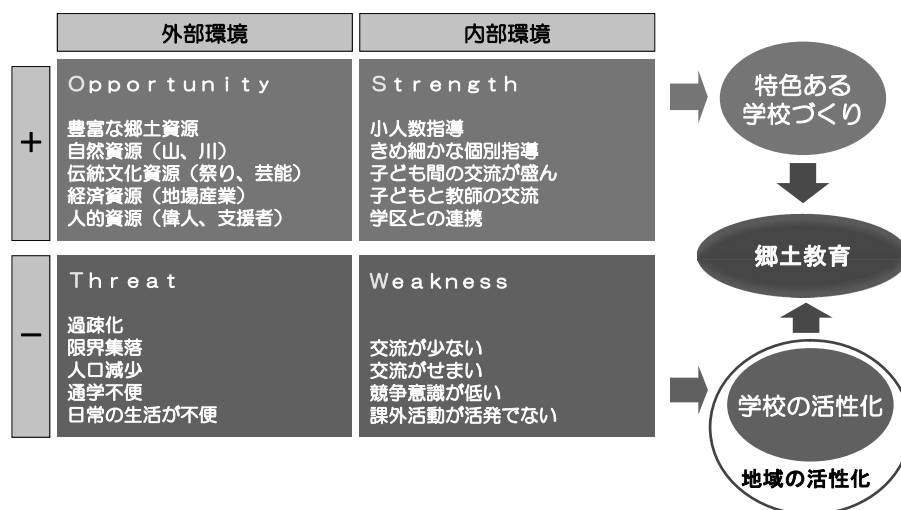
I. 農山村小規模校における学校の活性化と郷土教育

農山村の小規模校にとって郷土教育の導入がなぜ有効か。郷土教育の政策理念や教育価値を検討する前にその点を考えてみる。

一般に、農山村の小規模校はその立地条件と規模の面で都市の学校に比して学校活性化の条件が劣ると考えられている。確かに、山間僻地という立地条件の面で通学の不便や美術館・博物館などの課外学習施設などの不足があるといえる。また、学校内においても少人数のため単学級のまま進級し子ども間の人間関係が固定化され、社会性・リーダー性を育成することが難しいという面がある。しかし、一方、農山村の小規模校には自然環境をはじめ芸能文化などの豊富な地域資源があり、さらに少人数によるヒューマンな人間関係など、都市の学校にはない多くの利点も存在する。学校の内外の環境要因を検討しながら農村山小規模校の現状を分析してみよう。

以下の図1は、農山村の小規模校の学校改善のイメージ図である。ここでは、一般に組織のビジョン設計のための環境要因分析ツールとして流通しているSWOT分析により検討してみた。まず、学校組織を内部環境と外部環境に分け、それぞれにプラス要因とマイナス要因を抽出した。その結果、農山村の小規模校は図のような結果が予想された。まず、マイナス要因については、学区（農山村地区）の衰退（人口減少、生活の不便など）（「脅威」）と小規模校の弊害（交流の少なさなど）（「弱さ」）から、学校の活性化という課題がイメージされる。しかし、プラス要因については豊富な地域資源（「機会」）と少人数の効果（「強み」）から、農山村の小規模校特有の特色ある学校づくりがイメージされる。その結果、農山村の小規模校の学校改善ビジョンは、学校の活性化のために特色ある学校づくりを進めることに集約されることになる。

図1 農山村小規模校の現状と郷土教育



この場合、どのような特色ある学校づくりがイメージされるであろうか。一つは、小規模校の利点（「強み」）を活かした少人数教育を徹底することである。教科を中心に一人一人の児童・生徒の学力に応じたきめ細かな個別指導を強化し、学力向上に向けた実践が期待される。もう一つは、立地条件を活かした特色づくり、すなわち豊富な地域資源を活かしたカリキュラムの開発と実践である。そのカリキュラム開発と実践は、地域資源を教育資源として活用することを内容とする。そこに、「郷土教育」の推進による学校の活性化の可能性があると見える。この点、都市の学校は交通条件や流通条件等においては消費生活環境としては高い利便性がみられるが、その地域資源が必ずしも教育資源として有効とは限らない。例えば、身近に多くのコンビニがあってもそこにあるものは消費品としての商品であり、地域の人々が地域で生産した生産物・特産物ではない。それは学習資源にはならない。また、自然資源は乏しく、伝統文化資源は逆に衰退する傾向にある。また、都市の学区は通学空間もしくは生活空間としての境界の意味が強く、そこに「郷土」としてのイメージは薄く、「愛郷心」の育成が困難であるという条件を持っている。その意味では、郷土教育は農山村の学校にしかできない特色ある学校づくりの方法といえよう。それは、おそらく都市型の学校で展開される学校単独実施型の特色づくり（英語教育、国際理解教育、IT教育など）とは異なる大きな「売り」となるものである。

ところで、農山村の学校における郷土教育の推進の効果は、単に学校の活性化だけを意味しない。それは、郷土教育が単に「愛郷心」の育成だけではなく、自分たちの郷土の課題を意識し、郷土の発展を考えるとという目標・ねらいを持ち、その目標・ねらいは同時に

地域の大人たちの課題として共有されるものだからである。その意味では、次世代による郷土の資源の継承・発展による地域の活性化が期待される。また、郷土教育がその方法において地域との連携すなわち地域の人々の支援により展開されるという特性を持つ点で、逆に地域の大人が地域資源の継承者として自覚し、支援を通じて高い自己効力感をもつことが予想される。例えば、地域の舞や神楽、太鼓など一度途絶えた地域の伝統芸能が郷土教育の推進により復活することは、当然に地域の文化の活性化に働くわけである。その意味では、郷土教育による学校の活性化は同時に地域の活性化に通じるという効果が期待される。

なお、地域の活性化の視点からみた場合、近年、児童数が減少し存続が危ぶまれる農山村地区の小規模校に対して小規模校の良さや地域資源を活かした「特色ある学校づくり」を進めることを条件に、通学区域の弾力化により学区外からの児童生徒の募集を認める「小規模校特認校制度」(1)も進行している。この制度の適用を受ける小規模校は、学区外からの児童を呼び込むだけの魅力的な学校づくりとして、その多くが少人数指導の充実と地域資源を教材化しさらに地域と連携した郷土教育型のカリキュラム開発を行い、効果を上げている。

この点、実際に都市に住み、田舎への移住を希望する人たちの田舎の学校に対するイメージは以下(図2)のようである(2)。それをみると、「少人数のきめ細かな教育」や「地域と学校が密接に関わり合う環境」さらに「地域資源を活かした教育」へのニーズが高いことがわかる。

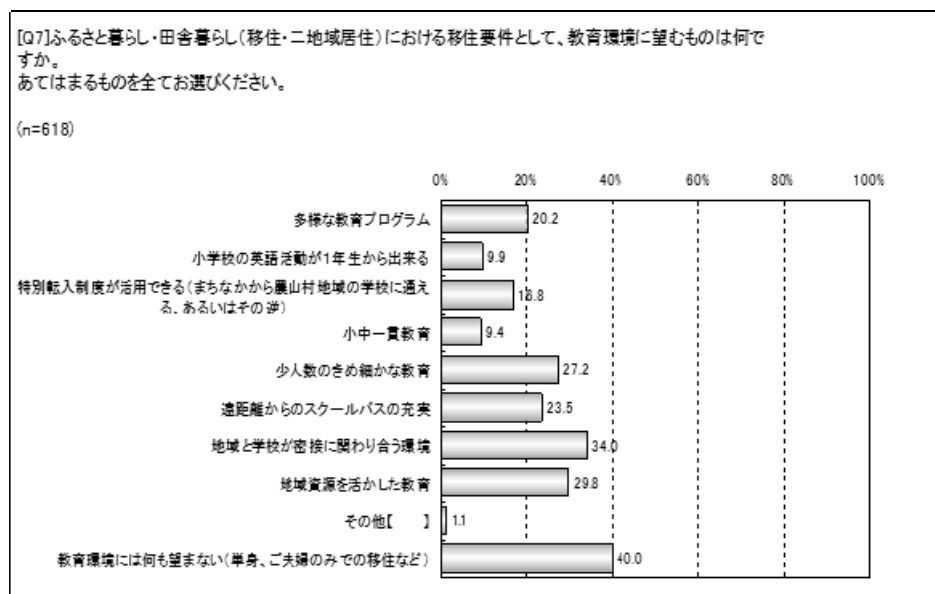


図2 移住希望者が求める田舎の教育環境

以上のことから、農山村の小規模校にとって郷土教育の導入が最も効果的で可能性のある特色ある学校づくりであり、同時に地域の活性化策であることがわかる。

II. 日本の教育目標と郷土教育の課題

実際の郷土教育の方法を考える前に、改めて郷土教育の原理と価値を検討してみよう。それは、国の政策としての郷土教育の理念と方法を検討することを意味する。

教育基本法第2条(教育の目標)

教育はその目的を実現するため、学問の自由を尊重しつつ、次に掲げる目標を達成するよう行われるものとする。

1. 幅広い知識と教養を身に付け、真理を求める態度を養い、豊かな情操と道徳心を培うとともに、健やかな身体を養うこと。
2. 個人の価値を尊重して、その能力を伸ばし、創造性を培い、自主及び自律の精神を養うとともに、職業及び生活との関連を重視し、勤労を重んずる態度を養うこと。
3. 正義と責任、男女の平等を、自他の敬愛と協力を重んじるとともに、公共の精神にもとづき、主体的に社会の形成に参画し、その発展に寄与する態度を養うこと。
4. 生命を尊び、自然を大切にし、環境の保全に寄与する態度を養うこと。
5. 伝統と文化を尊重し、それらを育んできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと。

近年（2006年）、国は旧教育基本法の「教育の方針」（第2条）を削除し、新たに以上の「教育の目標」（第2条）を新設した。それは、言葉上、原則の指標を意味する「方針」(principle)が具体の指標を意味する「目標」(goal,target)に変更されたように、日本の教育指標をより具体的で実際的な方向に求めるものであった。

その方向とは、具体的な国民育成であり、日本人としてのアイデンティティの形成であった。詳細には、以下の図3のように養成すべき「態度」としての項目が詳細に五つ設定された。すなわち、日本の教育目標はより具体化され、項目（主義）化されたわけである。

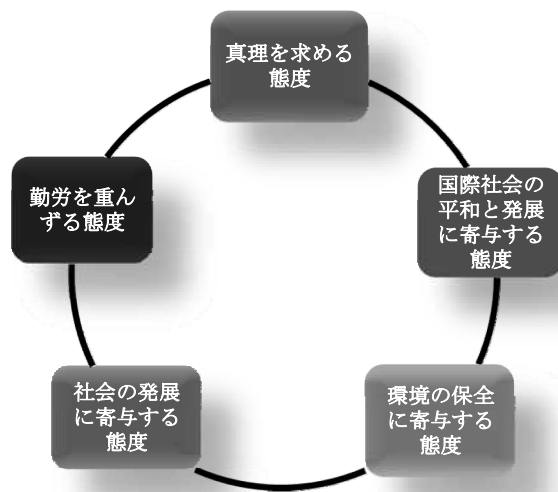


図3 教育目標における項目

この中で最も注目されたのが、「国際社会の平和と発展に寄与する態度」であった。それは、単に国際人としての態度育成（国際理解教育、異文化教育）が求められるのみではなく、その前提として「伝統と文化を尊重し、我が国と郷土を愛する」ことが求められている。この場合、「伝統と文化を尊重し、我が国と郷土を愛する」という規定は、明らかに「愛国心」と「愛郷心」の育成のための教育の推進を求めるものであり、本稿で課題とする郷土教育推進の根拠（法）になるものである。

今回の教育基本法の改正はここがポイントになっている。教育基本法改正当時多くの改正論者は旧教育基本法に対して、伝統や文化の尊重、郷土や国を愛する心、道徳心、自律心などの規範が欠落していることを批判し、国民が順守すべき徳目を新たに法定化することを主張した。

この場合、求められる日本の国民像はどのように変化したのであろうか。旧教育基本法と改正教育基本法の比較を通じて検討する。旧教育基本法が求める国民像は、民主的な社会秩序（市民社会）を自らの手でつくるという「主体的な個人」であり、そのための「教育目的」に「人格の完成」が設定された。その「人格の完成」自体には「国民の育成」との関係性が不明確で、「国民像」としての具体性はなく、それまでの国家主義的・軍国主義的な「臣民」教化思想（教育勅語体制）への反思や反省と戦後の民主主義社会形成の原理思想の受容により、「人格の完成」があえて法定化されたといえる。一方、改正教育基本法は多くの改正論者の言説（「日本でなくてはいけないという要素はあまりない」(3)）にしたがえば、「人格の完成」の概念に内在する無国籍性と観念性を批判し、「あるべき国民像」「望ましい国民像」を五つ態度（項目）の養成により実像化することを求めたといえる。そのため、先の「愛国心」と「愛郷心」の育成は単に一つの態度である「国際社会の平和と発展に貢献する態度」の条件ではなく、五つの態度の養成の完成形として「理想的な日本人

像」の構成原理に等しい比重を持たされたといえる。

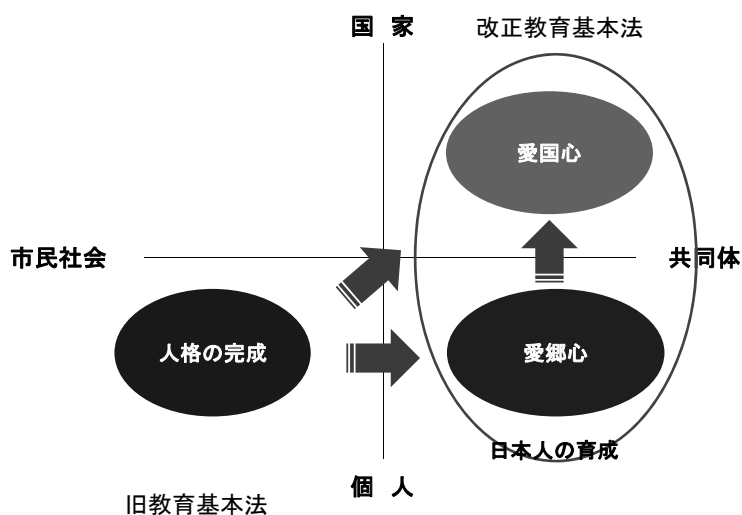


図4 教育基本法の改正と愛郷心

改めて、教育基本法改正による国民像の育成の変化を構造的に考えてみる（図4）。大きくはその改正は「人格の完成」（旧教育基本法）から「日本人の育成」（改正教育基本法）への変化と考えられる。さらに、その「日本人の育成」には「愛国心」と「愛郷心」の二つの心情的価値が並列に置かれる。この場合、学校現場サイドにとって検討しなければならないのは、「愛国心」と「愛郷心」の二つをどうとらえ、どのように関係づけるかという点にある。

課題は「愛国心」の育成にある。周知のようにこれまで「愛国心」については戦前・戦中の偏狭なナショナリズムや軍国主義に傾斜したイメージが強く、実際国旗掲揚・国歌斉唱に関する教員処分事件もあった。また、教育基本法の改正では「我が国と郷土を愛する」（第2条）の部分国会審議のみならずマスコミ報道を通じて論争となった。この背景には、愛国心の育成が国家主義的・軍国主義的な教化を通じて反民主主義的な精神統制を招くのではないかという懸念と反発があった。

しかし、「愛国心」は、日本の場合歴史の過程で軍国主義化の精神的「道具」として使用されたという不幸な過去があるが、そのみをもって否定・批判の対象として排斥されるものではない。世界的には、いわゆる国民国家においてはむしろ「愛国心」の育成は国民育成にとって不可避なものといえる。また、「国を愛する」という場合の「国」は、決して「統治機関としての政府や内閣（ではない）」（4）とされ、観念的に「歴史的に形成されて

きた国民、国土、伝統、文化などから成る歴史的・文化的な共同体」(5)とイメージされる。したがって、「我が国と郷土への愛」は戦前の愛国心という言葉の下で個人の尊厳が破壊された戦前に戻るということを意味してはいない(6)。以上のことを考えれば、「我が国と郷土への愛」は、戦前戦中の国家主義(国家ナショナリズム)の教化ではなく、共同体としての社会形成のために国民形成を目指す方法と考えることができる。

一方、郷土を愛する心を意味する「愛郷心」も情緒的な概念であり、一定の経験される場で育ったことに対する感謝の念を持つ心や、ふるさとを誇りに思う気持ちあるいは指数化すれば故郷への「自慢度」「愛着度」などさまざまに表現できる。しかし、それは「愛国心」と異なりパーソナルな人格形成の基盤に実在し、大きく人格実現(形成)史の基礎を確実に形成する。その意味では、その実存性と価値性は「愛国心」より高い。

つまり、「愛国心」と「愛郷心」は必ずしも同一の国民形成の価値ではない。むしろ、学校教育がストレートに「愛国心」教育を行うとすれば、そこには愛国主義的な教化の弊害が当然に懸念される。この場合、その媒介に位置づくのが「愛郷心」の育成であるといえる。このとき、郷土は愛国心と愛郷心が交錯する結節点となる。実際、子どもの社会認識はその発達段階に応じて、身近な社会から市町村・都道府県そして国さらに世界という学習の順序的な単元化がある。その意味においても、郷土教育はこれからの国民形成において重要な学習価値をもつ。

III. 郷土教育のカリキュラムの基本原則

それでは、郷土教育の内容はどのように構成できるのだろうか。そのヒントが学校教育法の改正と今回の学習指導要領の改訂にあるといえる。郷土教育を推進しようとする国は、教育基本法の改正により「我が国と郷土への愛」を法定化した後、具体的な学校教育の目標を定める学校教育法の次元でも改めて義務教育の目標として「愛国心」「愛郷心」の内容を以下のように規定した。

<p>学校教育法第21条(義務教育の目標) 義務教育として行われる普通教育は、教育基本法(平成18年法律第120号)第5条第2項に規定する目的を実現するため、次に掲げる目標を達成するよう行われるものとする。 (略)</p> <p>三 我が国と郷土の現状と歴史について、正しい理解に導き、伝統と文化を尊重し、それらを育んできた我が国と郷土を愛する態度を養うとともに、進んで外国の文化の理解を通じて、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと。</p> <p>教育基本法第5条(義務教育の目的) 2項 義務教育として行われる普通教育は、各個人の有する能力を伸ばしつつ社会において自立的に生きる基礎を培い、また、国家及び社会の形成者として必要とされる基本的な資質を養うことを目的として行われるものとする。</p>

そこでは、先に教育基本法で新たに規定した教育目標がさらに詳しく規定されている。このことは、教育基本法の改正により「国家及び社会の形成者として必要とされる基本的

な資質を養うこと」(教育基本法第5条)が「義務教育の目的」として新たに規定され、その義務教育の目標を新たに学校教育法に規定する必要があったからと考えることができる。実際、改正された学校教育法では、従来(旧学校教育法)小学校と中学校で別々に定められていた「(教育の)目的・目標」が義務教育の目標として統一された。新たに規定された義務教育の目標は全部で10項目に及ぶが、その一つに「我が国と郷土を愛する態度を養うこと」が規定され、「愛国心・愛郷心」の育成が日本の小学校・中学校の正式な教育目標になった。

さらに、国はその「愛国心・愛郷心」の育成を学校の教育実践に具現化するため、学校の教育課程編成の「法的拘束力をもつ大綱的基準」と言われる学習指導要領を改訂し、記載した。この改訂学習指導要領は、一般には学力向上のための授業時間数の拡大が注目されるが、「各学校においては、教育基本法及び学校教育法等の示すところに従い、適切な教育課程を編成するものとする」として、学習指導要領が教育基本法等の改正理念を踏まえたものであることに特徴がある(7)。実際、教育基本法第2条の教育目標を踏まえた新たな改訂の柱が示されており、「愛国心・愛郷心」の育成に関連する内容(第5号関連)は以下のようなものである。

ここで注目されるのは、郷土教育が社会科や総合的な学習のみならず広く各教科の中で指示されている点である。例えば、国語では書写や文語、社会では地域の文化財や年中行事さらに先人、算数ではそろばん、音楽では地方に伝承されているわらべ歌や民謡、体育では伝承あそびや地域の踊りが強調されている。また、道徳では特に低学年・中学年・高学年ごとに、愛郷心(「郷土愛」)の育成が強調されている。なお、これまでの学習指導要領の改訂史をみると、一度昭和33年の学習指導要領において「郷土教育」が登場し、一般に普及した。昭和43年の学習指導要領の改定で「地域学習」に変化した。今回の改定で再び「郷土教育」が復活したことになる。

一方、総合的な学習の時間については、各教科での知識・技能の習得と総合的な学習の時間での課題解決的な学習・探究活動の横断的連携が従来弱かったと反省し、両者を媒介する活用型の学習活動を方法とするよりいっそうの教科横断的連携を求めている。実際、その実践に関しては、多くの学校は教科の発展的な学習の時間や行事活動に充てたり、テーマに関して例示的にあげられる情報教育・異文化理解(実際は小学校英語)を設定する傾向にあった。そのため、その新たな目標は「総合的な学習や探求的な学習を通して、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成するとともに、学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的、協同的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにする」とされている。

表1 改訂学習指導要領にみる郷土教育の関連内容（小学校）

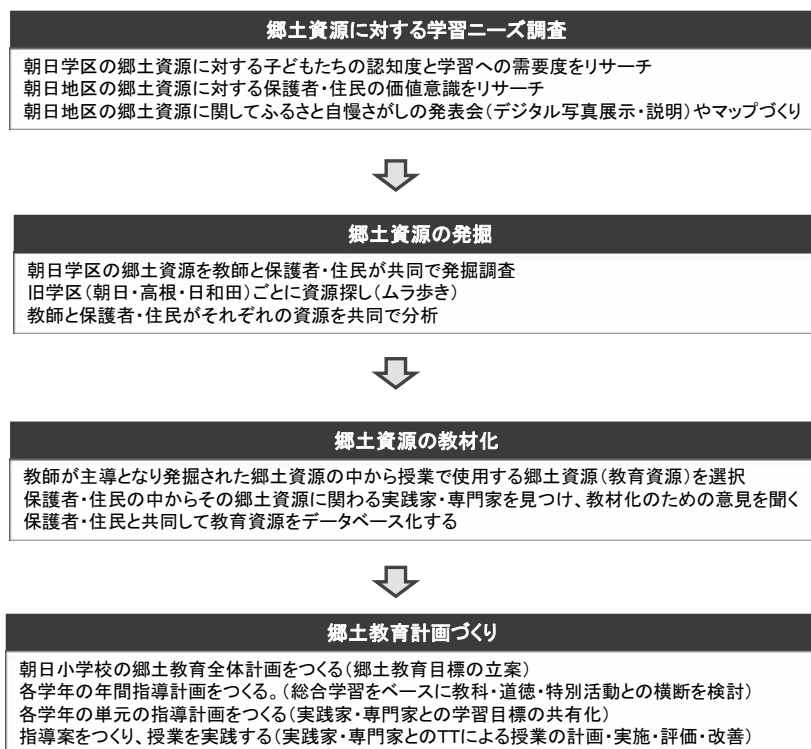
教科・道徳	項目	内容
国語	言語事項	(2)ア 書写に関する事項 毛筆(第3学年以上) (1)エ(ア) 易しい文語調の文法を音読し、文語の調子に親しむこと(第5・6学年)
	第3 指導計画の作成と各学年にわたる内容の取扱い	3(2) 教材は、次のような観点に配慮して取り上げること。 ク 我が国の文化と伝統に対する理解と愛情を育てるのに役立つこと(教材への配慮、各学年)
社会	第3学年及び第4学年 2 内容	(5) 地域の人々の生活について、次のことを見学、調査したり年表にまとめたりして調べ、人々の生活や人々願 い、地域の人々の生活に尽くした先人の働きや苦心を考えるようにする。 ア 古くから残る暮らしにかかわる道具、それらを使っていたころの暮らしの様子 イ 地域に残る文化財や年中行事 ウ 地域の発展に尽くした先人の具体的事例
	第3学年 2 内容	A 数と計算(5) そろばんによる数の表し方について知り、そろばんを用いた簡単な加法及び減法の計算ができるようにする。 ア そろばんによる数の表し方について知る。 イ 加法及び減法に計算の仕方について知る。
算数	第3 指導計画の作成と各学年にわたる内容の取扱い	2(5) 問題解決の過程において、桁数の大きい数の計算を扱ったり、複雑な計算をしたりする場面などで、そろばんや電卓などを第4学年以降において適宜用いるようにすること。(中略)また、低学年の「A 数と計算」の指導に当たっては、そろばんや具体物などの教具を適宜用いて、数と計算について意味の理解を深めるよう留意すること。
	第5学年及び第6学年 1 内容	B 鑑賞(2) 鑑賞教材は次に示すものを取り扱う。 イ 歌曲、室内楽、尺八を含めた我が国の音楽、諸外国にわたる音楽など、いろいろな種類の楽曲
音楽	第3 指導計画の作成と各学年にわたる内容の取扱い	2(6) 歌唱教材については、共通教材のほか、長い間親しまれてきた唱歌、それぞれの地方に伝承されているわらべうたや民謡など、日本のうたを取り上げること。
	第1学年及び第2学年 3 内容の取扱い	(3) 地域や学校の実態に応じて歌や運動を伴う伝承あそび、自然の中での運動あそび及び簡単なフォークダンスを加えて指導することができる。
体育	第5学年及び第6学年 2 内容	F表現活動(1) 表現及びフォークダンスについて、身近な生活の中から題材を選んで動きに変化と起伏を付けて表現したり、地域の踊りや世界の踊りを身に付けたりして、みんなで踊りを楽しむことができるようにする。
	第2 内容 4 主として集団や社会との かかわりに関すること。	(4) 郷土の文化や生活に親しみ、愛着をもつ。(第1学年及び第2学年) (5) 郷土の伝統と文化を大切にし、郷土を愛する心をもつ。(第3学年及び第4学年) (6) 我が国の文化と伝統に親しみ、国を愛する心をもつとともに、外国の人々や文化に関心を保つ(同上) (7) 郷土や我が国の文化と伝統を大切に、先人の努力を知り、郷土や国を愛する心をもつ。(第5学年及び第6学年) (8) 外国の人々や文化を大切にすることをもち、日本人としての自覚をもって世界の人々と親善に努める。(同上)
道徳		

詳細には、「第3 指導計画の作成と内容の取扱い」において、「地域や学校、児童の実態に応じて、教科等の枠を超えた横断的・総合的な学習」を引き続き求めるとともに、「地域の人々の暮らし、伝統と文化など地域や学校の特色に応じた課題」の学習を求めている。

以上の意味では、郷土教育の時間及び領域においてはこの総合的な学習の時間がより条件的に適しているとともに、教科横断的な探求学習の価値を求めるという指導目標においても適していると判断される。総合的な学習の時間は「学校知」と「生活知」を結ぶ学習の場であるという意味においては、これまで「地域学習」が実践された場であるという意味においてもより強く郷土学習の場としてふさわしいといえよう。

第2章 郷土教育の推進と郷土教育計画づくり-朝日小学校を例として-

図5 朝日小学校郷土教育推進のフローチャート



ここでは、実際に朝日小学校をケースとして、郷土教育の推進のための郷土教育計画づくりについて検討してみる。先に郷土教育の推進の手順を示せば、以上ようになる(図5、図番号は第1章からの通し番号、表番号も同様。)。以下、その手順に即して概要を説明する。

I. 郷土資源に対する学習ニーズ調査

最初に検討しなければならないのは、子どもたちの郷土資源に関する認識と学習ニーズの把握であるといえる。日常の生活空間としての郷土は子どもたちの生活の中では「あたりまえのように」存在し、そこに内在する郷土資源としての学習の価値は見過ごされる。例えば、自然資源としての「御嶽山」や伝統文化資源としての「お地藏さん」は通学途中

のただの風景の一つになり、社会資源としての地場産業の特産品の「うま辛王」や「日和田コーン」もただの消費する商品の一つになる。また人的資源としての朝日のおじさんやおばさんは単に近所の人になる。そこには、「御嶽山」「お地蔵さん」「うま辛王」そして「朝日の働く人」が郷土としての朝日を形成し維持してきたという感覚は生じない。そのため、まずは子どもたち自身の郷土に関する意識を検討しなければならない。

表2 自分の住んでいるふるさと好きですか

	朝日小児童	朝日中学生	計
好き	33(89.2)	59(76.6)	94(82.4)
嫌い	1(2.7)	16(20.8)	17(14.9)
どちらでもない	3(8.1)	1(1.3)	3(2.7)
計	37(100.0)	77(100.0)	114(100.0)

〔「地域への思い」アンケート調査 がやがや会議 平成23年7月19日発表資料より〕

まず、子どもたちは郷土が好きかどうかを検討してみる。昨年の朝日小学校・中学校の児童生徒に対する「地域への思い」調査（学校調査）によると（表2）、自分のふるさとが好きだと回答した子どもは全体の約82パーセントに及ぶ。特に小学校児童の場合は、約90パーセントが「好き」と回答している。中学生になってその数値はやや減少するものの、朝日学区の多くの子は郷土が好きだと考えている。

表3 あなたは将来、今住んでいるふるさととどのようにかかわっていきたいか

	朝日小児童	朝日中学生	計
将来このふるさとに住みたい	31(86.1)	34(45.3)	65(58.6)
将来住まないが、自分の大切なふるさととして思いつづける	2(5.6)	36(48.0)	38(34.2)
将来住まないが、自分のふるさととして思うことはあるだろう	3(8.3)	5(6.7)	8(7.2)
計	36(100.0)	75(100.0)	111(100.0)

〔「地域への思い」アンケート調査 がやがや会議 平成23年7月19日発表資料より〕

しかし、将来的に郷土に定住する意識については（表3）、全体の58.6パーセントが

「将来このふるさとに住みたい」と回答するが、一方で「将来住まない」が合計で41.4パーセントと多い。この傾向は、特に中学生に顕著であるといえる。このことは、進学後のリクルート（就職）による居住事情を考えれば避けられないことであろう。ここで重要なことは「将来住まないが、自分の大切なふるさととして思いつづける」（朝日中生徒48パーセント）と大半の子どもが意識しているという事実である。

以上のことから、子どもたちにとって郷土は将来的に定住の場所とは限らないが、大切なふるさとであり、またそのふるさとに貢献したいという思いを持っていることがわかる。

一方、現在の郷土はどのように意識されているであろうか。現在の郷土は将来子どもたちにただ「ふるさと」として思い出されるだけのものではない。それは、現在の子どもたちの生活世界であるとともに、学ぶことのできるさまざまな（学習）資源の集合でもある。むしろ、郷土は単に「愛郷心」の心情を醸成するだけでなく、自然資源・伝統文化資源・経済資源そして観光資源の「宝庫」でもある。

子どもたちの郷土の資源への認知度をみてみよう。以下の図6は、郷土の地域資源に関する生徒の認知度を示した結果であるが、全体に地域資源に対する認知度は高くない。その中でも、経済資源や文化資源に対する認知度は特に低い傾向にある。例えば、朝日の森林産業や農業・酪農などの経済資源は、継承され、活性化しなくてはならない地元産業であるにもかかわらず、後継者としての子どもたちに認知されていない。また、朝日に古くから伝わる昔話・伝記（「美女峠」「惣左右衛門」「福釜」など）や祭事などの文化資源は、文化の被継承者としての次世代の子どもたちに認知されていない。この点、地元産業と郷土の伝統文化の継承に大きな課題があるといえる。

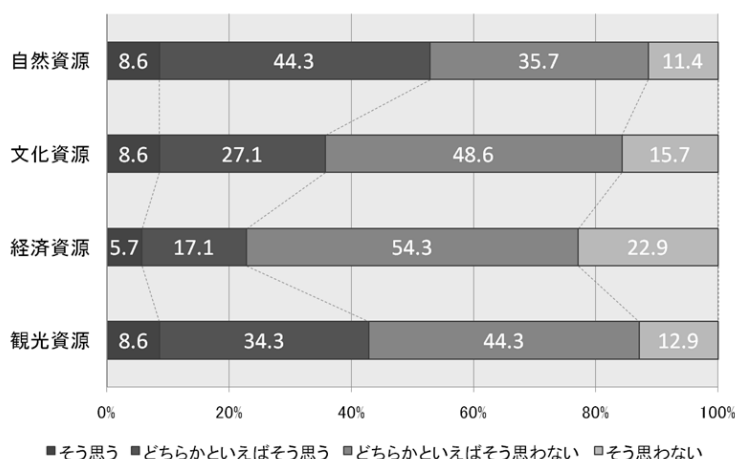


図6 子どもたちの郷土資源への認知度

(生島五樹子「郷土学習と地域の活性化」日本学習社会学会第8回大会公開シンポジウム発表資料より 朝日中学校生徒77名のうち回答数70名。2011年8月調査。)

一方、地域資源に対する学習意欲については、以下の図7のような結果となっている。ここでみられる特徴は、第一に全体に地域資源に対する学習意欲は認知度と比較して高い傾向にある。このことは、「知らないことを知りたい」という本来の学習のニーズを示しており、郷土学習のレディネスが高いことを意味している。

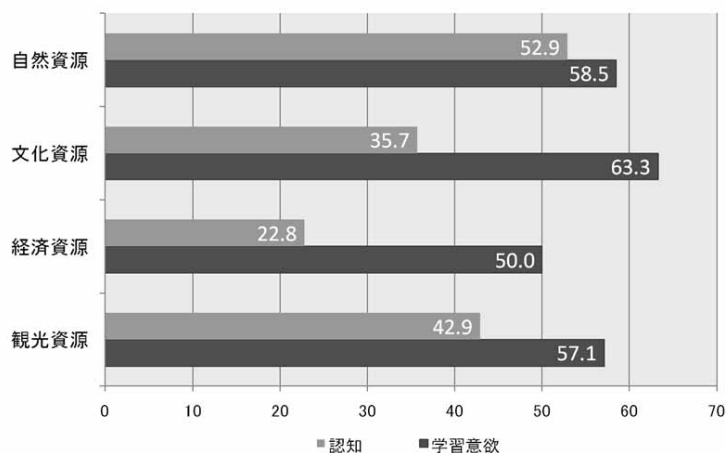


図7 地域資源に対する認知度と学習意欲度
(生嶋亜樹子 図6の発表資料より。)

第二に、認知と学習意欲の格差が、特に「文化資源」と「経済資源」において大きいということがある。このことは、子どもたちは地域の森林産業や農業・酪農や古くから伝わる昔話・伝記（「美女峠」「惣左右衛門」「福釜」など）に興味がないということではなく、「知らないから知りたい」と求めていることを表している。以上のことから、郷土学習はその強い学習レディネスの存在により、一定の教育効果が期待される領域と考えることができる。

II. 郷土資源の発掘

つぎに郷土資源の発掘の段階がある。この行程は郷土教育資源の素材となる価値ある地域資源の発掘の段階である。ここで注意しなければならないのは、その発掘は単に教師サイドの教材研究ではないという点である。それは、教師・保護者（地域住民）の共同的なワークとして行われなければならない。実際には、朝日学区の高根地区・日和田地区・秋神地区をそれぞれフィールドとして、それぞれの地区に存在する資源探しを行うこととなる。

具体的には、各地区ごとに地区担当教師と地区の関係者により調査チームを編制し、そのチームにより作業を行う。その手順は、①その地区の住民（保護者）へのヒアリングや村歩きにより、価値ある地区資源をおおよそリストアップする。②リストアップされた地

区資源を調査チームが伝統文化資源・自然資源・社会資源・人的資源に分類し、地区資源マップを作成する。③その資源の背景（歴史的・科学的条件）を研究する。④その資源の価値（子どもたちに伝承したい価値）の設定を目的に関係の住民（保護者）とワークショップを行う。

ここで重要なことは、教師が直接に地区に出向き、関係者のヒアリングから地区の地域資源の研究を行い、地区の資源に対する理解を深めるという点と地区の住民（保護者）の郷土資源の発展的継承の思いを認識するという点にある。それは、教師が一般にその地区の住民ではなく、単に学区が通勤先の学校の所在地という感覚に止まり、郷土資源の価値を容易に認識する条件にないという事情による。教師はこのリサーチで住民と一緒に村歩きをしながら、その郷土の空間の科学的認識と文化のふんいきを感知することができる。

一方、こうした当該の地区における住民の発掘作業は単に学校の活性化のみならず、地域の活性化に働くといえる。現在、農山村の地域は大きくは経済成長の停滞と産業構造の変化により中央への一極集中と産業の空洞化が進行している。それは、単に地域経済の衰退や限界集落化のみならず、地域の人々の意識の中に文化の衰退をもたらしているといえる。この場合、郷土の資源を発掘し、子どもたちにその資源価値を伝承するという行為は同時に自らの存在と地域の価値を再確認する行為となる。特に、学校統廃合により子どもの姿が見えない地区は、その旧学区において埋没する郷土資源を再活性化するという課題がある。この点、郷土教育の推進は学校の活性化であり同時に地域の活性化であるという二重の効果をもつことが意識されなければならない。郷土資源の発掘にはそのような意味があるといえる。

朝日学区の郷土資源を概観してみる（表4）。ここでは、朝日学区の4地区ごとに主な自然資源・伝統文化資源・社会資源・人的資源を抽出してみた。(8)

まず、豊富な自然資源が注目される。朝日学区は日本列島のほぼ中央、岐阜県の北東、大野郡の東に位置し、北に乗鞍岳、南に御嶽山さらに東に鎌ヶ峰の美しい山とそこから流れ出る飛騨川の源流に位置している（図8）。特に、乗鞍岳の眺望は美しく、旧朝日村は乗鞍岳から上る朝日のようにいさましく村が栄えることを願って朝日村と名付け、その風景を村章にデザインした。その意味では、乗鞍岳は朝日学区における「郷土のシンボル」であり、愛郷心のシンボルとしての効果をもつ。

また、中央日本山岳（内陸気候）型といえるその気候において、冬の気候は厳しいが高山系の植物が多く、春や秋には美しいももや、クロウリ、イワギキョウ、コマクサ、すずらん（すずらん公園）、レンゲツツジ（子の原高原、日和田高原）、ミズバショウ（美女ヶ池、ちんまが池、木曾馬牧場）、ヤナギラン（旧高根村の花）などの高山植物の花が咲く。

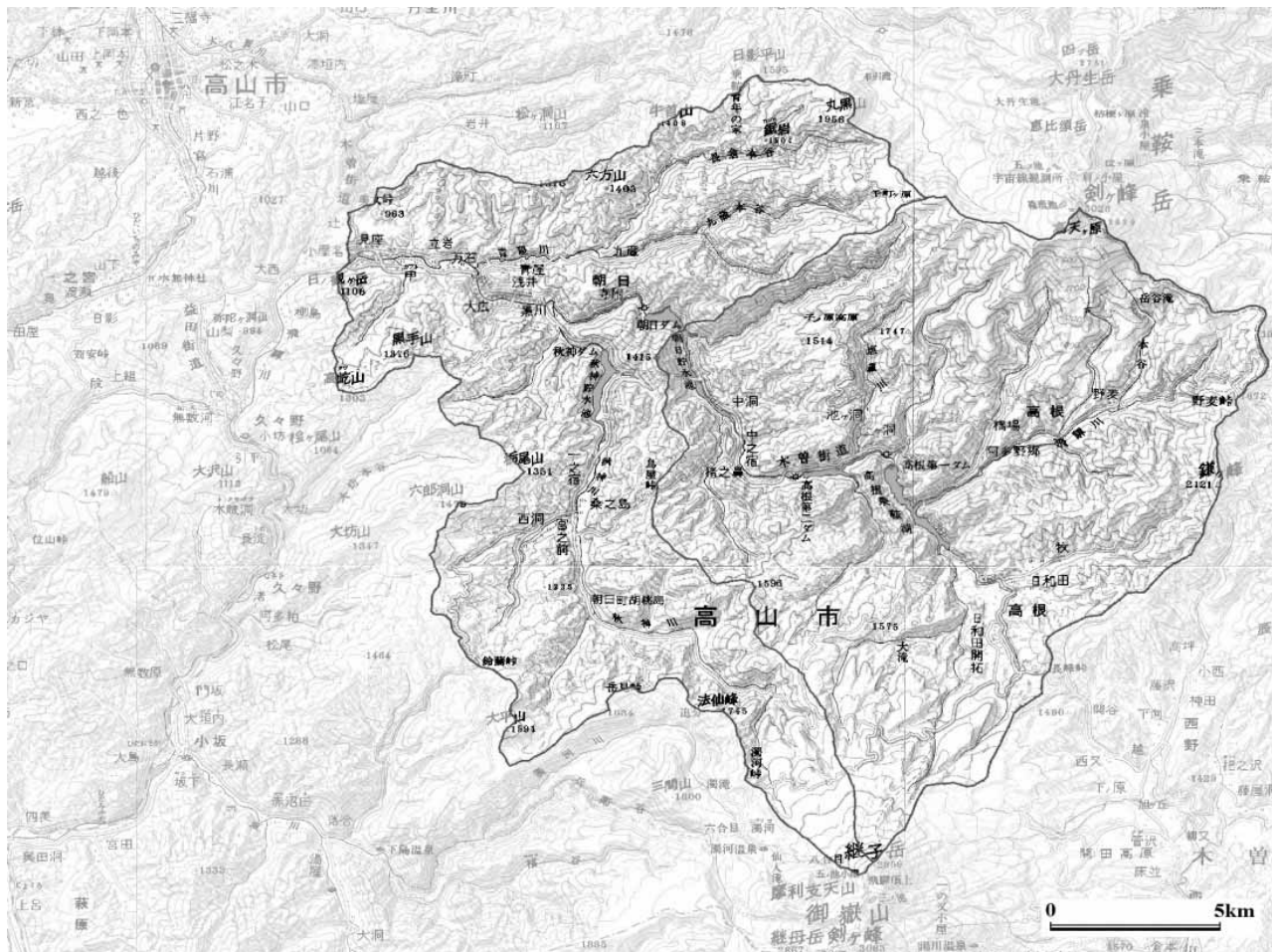
表4 朝日学区の郷土資源

地区	朝日	高根	日和田	秋神
自然資源	乗鞍岳（旧朝日村章のシンボル）、龍岩山（旧あさひ村のシンボル）、美女ヶ池（ミズパシヨウ）	乗鞍岳、子ノ原高原（高山植物）モリアオガエル（杣ヶ池）、柱状節理（石仏山）、大桑（日面平）、千間樽高原	乗鞍岳、日和田高原（高山植物）イチイの森、ミズパシヨウ	乗鞍岳、御嶽山氷柱 すずらん高原、白樺原生林
伝統文化資源	縄文遺跡（見座、万石、青屋） 白山神社（甲）、石碑（甲） 薬師堂（円空仏）、七本さわら	縄文遺跡 民族資料館（上ノ洞） 野麦峠の館（生活道具） 古民家（切妻造）、高根鉦山	先土器遺跡（池之原） 縄文遺跡、和銅開弥（内ヶ谷） 八幡神社（源義仲） 原家（石仏）、古民家（切妻造）	縄文遺跡（尖頭器） 古民家（切妻造） 天狗祭り
社会資源	林業（学校林）、馬・牛・養蚕業（見座、美女高原） ほうれん草、トマト栽培 朝日ダム、久々野ダム 朝日発電所、野中用水（青屋） 信州街道（国道361号線）	林業、馬・牛、養蚕業（野麦峠） わらび粉（子ノ原高原）、ほうれん草（「飛騨ほうれん草」）、飛騨牛（千町牧場、猪之鼻牧場など）、切花栽培、高根マリオンフーズ（山菜加工）、高根コーン、高根工房（工芸）うま辛王（道の駅）、高根第一、第二ダム、高根発電所、信州街道（野麦峠、野麦峠の館）、国道361号線	林業、馬・牛、養蚕業 信州街道（国道361号線） 日和田高原（無印、スポーツ施設） 木曾馬牧場、オケジッタスキー場 日和田コーン	林業、馬・牛、養蚕業 わらび粉（西洞、水車小屋） ほうれん草、トマト栽培（一之宿） 秋神ダム、民宿村、すずらん高原 秋神温泉
人的資源	商業・工業・林業・農業・牧畜業・養蚕業従事者、郷土史家 ダム・発電所従事者、特産物業者、甲村伝十郎（「大原そうど」）	商業・工業・林業・農業・牧畜業・養蚕業従事者、郷土史家 ダム・発電所従事者、特産物業者 大古井伝十郎（「大原そうど」）	商業・工業・林業・農業・牧畜業・養蚕業従事者、郷土史家 ダム・発電所従事者、特産物業者	商業・工業・林業・農業・牧畜業・養蚕業従事者、郷土史家、ダム・発電所従事者、特産物業者

（灰色字はすでに教材化された項目）

さらに、(匝) 高山帯の針葉樹も多くモミ（旧高根村の木）やイチイ（日和田、イチイの森）がある。一方、動物もニホンカモシカ（旧高根村の保護指定）やエゾイタチ、50種に近い鳥（ホトトギス、ウグイス）、いくつかの飛騨川支流の川魚（アマゴ、イワナ、ウグイ）が豊富である。四季を通じて存在するこのような豊富な自然資源は大きく学習資源としての価値をもつ。

図8 朝日学区の地図



一方、伝統文化資源については、歴史学や文化人類学さらに民俗学的な学習の価値が期待できる豊富な地域資源が多い。例えば、歴史学上先史期の石器が旧朝日中学校建設の基礎工事で発見され、日本で最も古い石器とされる「尖頭器」が秋神地区で採取され、多くの遺跡や遺物がある。さらに、奈良・平安期に創設された寺社仏閣も多く、江戸期の「大原そうどう」に関わる古跡もある。こうした歴史的遺跡・古跡は明治・大正・昭和を通じて現代までそれぞれの時代・社会の学習価値をもつ。また、学区に多くある民具などの生活道具や古民家の存在はそれぞれの時代の朝日の住民（農民）の生活を知るうえで、民衆史的観点からみて重要な伝統文化資源である。

社会資源については、朝日学区の林業・農業・工業や観光業などの経済資源をいう。この場合、朝日学区の経済資源はそれぞれの領域で大きな変化がある。例えば、農業は学区の総面積の90パーセント以上が山林であることから開拓に始まり、田の耕作面積を拡大

してきた。しかし、昭和初期までは田よりも畑の割合が多く、桑などの栽培による養蚕業や畜産業（馬・牛）を中心としていた。また、戦後は兼業化が進行し、ほうれん草やトマトのハウス生産（秋神）や山菜（なめこ、きゃらぶきなど）の缶詰生産などの特産品の生産を行い、現在も高根コーンやあま辛王などの特産品の製造・販売による地域経済の活性化を求めている。地域の後継者である子どもたちがこうした朝日学区の産業の構造変化を学び、さらに現在の地域経済活性化の実態と課題を学ぶことは、これからの朝日の地域活性化にとって重要なことであるといえる。

人的資源については、基本的には社会科的な学習の対象となる「働く人々」であり、さらにキャリア教育につながるいろいろな職業の学区住民をいう。ここでは、特に朝日学区に特有な職業の住民例えばとうもろこしやほうれん草農家や特産品業者（うま辛王の製造・販売業者など）、さらに林業従事者やダム関係者などが含まれる。この点、高根コーン・日和田コーンやうま辛王の生産・販売業者という人的資源は先の経済的資源と二重の資源的価値をもつ。また、人的資源には過去の人、すなわち郷土の歴史上の偉人も対象となる。例えば、百姓一揆として有名な江戸期の「大原そうどう」に関与した「大古井村伝十郎」（高根）や「甲村伝十郎」（朝日・甲）の伝記がある。ここでは、単に偉人の功績や偉大さを学ぶだけではなく、その時代背景の中で当時の農民（朝日の人々）の暮らしと社会（支配制度）との関係を広く深く学ぶ資源となる。この資源も伝統文化資源と二重の価値をもつ。

Ⅲ. 郷土資源の教材化

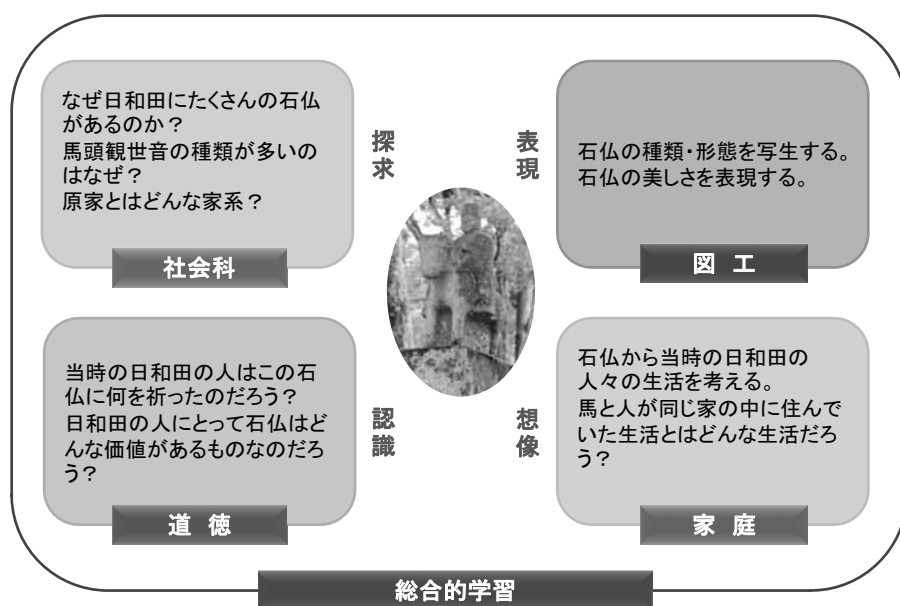
つぎに郷土資源の教材化の段階がある。ここでは、教師が主導となり郷土資源の中から授業で使用する郷土資源の選択を行う。この場合、選択された郷土資源は教育資源となる。したがって、この選択は郷土資源の教育資源化であり、教材化であるといえよう。このとき、教師にはその郷土資源が教材としてどのような学習価値を持つかの専門的な分析が求められる。例えば、自然学習は一般にそれが野外活動を方法とする観察授業であるため教師から敬遠されがちで、身近な自然に関心を持たせ子どもたちが自ら探求して科学的自然観を身に付けさせることは難しいとされている（特に都市の学校では）。この点、郷土学習の中で郷土の自然やその形成史の学習価値を野外活動を方法とするカリキュラムとして開発する視点がなくてはならない。そこでは、単に自然を観察するだけではなく、その自然が郷土としての地域にどのような影響を与えてきたかなど、発展的学習への連鎖がある。学校の近くに学習で活用できる「露頭」の豊富な農山村の学校は、より有効な自然学習の開発ができる。その意識を教師は持たなくてはならない。

また、教師は郷土学習の単元構成原理の関係構造を視野に入れておかなければならない。それは、「郷土を愛する」ことを学びの価値とする道徳的な単元構成原理と「自然資源」「伝統文化資源」「経済資源」等の科学的知識を学びの価値とする教科的な単元構成原理の関係である。この二つの単元構成原理は一見相反関係のように思えるが、例えば「感動」は「事

実」から起こると言われるように、ノン・フィクションの地域資源の観察や体験さらに探求学習から科学的理解を通じて、郷土としての地域へ心情を醸成することが求められる。特に、郷土としての地域の衰退に対してどのような活性化の手立てがあるかを考えさせる授業実践は、社会科学的な理解を通じて愛郷心を育成する一つの方法となる。郷土教育は単に愛郷心を育成するだけの道徳的实践ではない。学びはすべて地域資源の中にあるといえる。仮に低学年の段階で学校の周りを探検し、「ふるさとのよさに気づく」という心の学びの段階も、「ふるさとのよさを理解し考える」（中学年）、「ふるさとのよさを理解し、ふるさとを発展させる」（高学年）という学年進行の発展的な学びがなくてはならない。

例えば、朝日学区・日和田地区にある「石仏」を教材化する場合、以下の図9のような単元構成が求められる。一つは道徳的観点から石物の宗教的価値の認識を通じて愛郷心の育成を図ることが求められる。むかしの朝日の人々の生活は自然（天候）に左右されることが多く、そのため神様や仏様を石に彫り、それを守護神として祈った。その「具象」として石仏を感じさせ、「生活における祈り」が重要であったという宗教の価値を子どもたちに「認識」させなければならない。

図9 石仏(日和田)の教材化



一方で教科的学習価値として、例えば社会科的観点から探求的な学習が求められる。それは、550体以上の石仏がなぜ日和田にあったのか。それらはいつ誰によって造られたのか。そしてなぜ馬頭観世音などの特別な石仏が造られたのか。当時の社会背景特に経済

的な状況の歴史的探求が求められる。また、図工的な観点からは、美術品としての石仏の鑑賞にもとづく「美」の表現が求められる。「馬頭観世音」「愛宕神」「不動明王」「田の神」「山の神」そして「道祖神」「地蔵」など、種類ごとの石仏の形状を観察し、その特徴を理解し、「祈り」の美しさを表現することが求められる。さらに、家庭科的観点からも、「馬頭観世音」などから、当時の日和田の人々の暮らし（生活の様式）を想像することが求められる。最終的には、以上のような教科・領域ごとの単元価値を総合的学習のフィールドにおいて体系化し、実践化することが郷土資源の教材化の課題となろう。

なお、この教育資源化についてはその郷土資源に関わる事業者（実践家）・専門家としての学区住民（以下「資源当事者」という）の意見も十分に聞くことも求められる。それは、資源当事者が教師以上にその資源の社会的価値を認識し、それを子どもたちに伝承したいという熱い思いをもっているからである。特に伝統文化資源の場合、その伝承は「文化の内面化」であり、熱い郷土へのまなざしをもつ。教師はまずはその熱い思いを聞くことから始めなくてはならない。資源当事者の思いは、その教育資源を教材とする授業の「ねらい」を構成する。

また、教師は郷土資源の教材としての選択に関しては、その資源を使った実際の授業の進行をシュミレーションしなければならない。例えば、それが自然資源である場合、移動・場所設定・時間配分など条件的なマネジメントが強く求められる。

つぎに、以上のように教育資源として選択された郷土資源はデータベース化されなければならない。そのためには、郷土教育資源を開発・保管する「ふるさと学習館」（仮称）の設置が求められる。このふるさと学習館は、大きくは①教師たちの郷土教育の授業を支援する場、②住民の生涯学習の場、そして③子どもたちの郷土学習の発表の場としての機能を持たせたい。例えば、①授業支援の場としては、その場が教師たちによる郷土教育の年間指導計画や単元指導案さらに個々の授業の指導案づくりのためのカリキュラム開発の場となる。さらに、その場は資源当事者としての住民との共同開発の場となる。また、郷土教育として実施された個々の授業の教材や資料そして記録をデータとして分類・保管すれば、そこがカリキュラムセンターとして効率的に次年度の指導に役立てることができる。

また、②住民の生涯学習の場としては、そこに資源当事者のみならず多くの住民が出かけることにより、広く自分たちの郷土のほこり・価値を学び、自身のアイデンティティを自覚し、自己形成・自己開発できる場となる。特に資源当事者としての住民にとっては、自身が学校教育に貢献しているという自己効力感をもつことができる。さらに、③子どもたちの学習発表の場としては、子どもたちが郷土学習を通じて学んだ成果（特に芸術領域）を展示・発表する機会としたい。例えば、朝日地区に伝わる龍巖太鼓の練習成果の発表や子どもたちが地域の宝を撮影したデジタル写真展や子どもたち自身が地域の文化資源をリサーチした「地域文化マップ」の展示が有効になると考える。

IV. 朝日小学校の郷土教育計画づくり

最終的には、朝日小学校の郷土教育計画が作成されなければならない。この郷土教育計画は大きくは、①郷土教育全体計画、②郷土教育年間指導計画、③単元計画、④指導案の作成に及び。

先に現在の朝日小学校の郷土教育の内容（表 5）を概観してみよう。

表5 朝日小学校の郷土教育の内容

学年	領域	内容	ねらい
1年生	生活科	町の人と顔見知りになる活動 川あそび 夏祭り 昔のあそびを知ろう 木の実を使って 春さがし 畑の見学 牛のせわ	郷土学習の入り口 郷土学習の土台づくり 広く朝日の自然資源・社会 資源・文化資源にふれる
2年生	生活科	地域のマップづくり 町の自然探検(畑、田んぼ、そば畑、牧場) みんなが使う場所探検(道の駅、郵便局、役場 など) 町の人にインタビュー	
3年生	総合的学習	高根じまんを見つけよう 「うま幸王」(社会資源) 「子の原高原」(自然資源) 「よもぎ」(社会資源)	朝日地区・日和田地区・秋 神地区に分けて、それぞ れの地区の社会資源・自然 資源・伝統文化資源から郷土 について学びを深める
4年生	総合的学習	日和田じまんを見つけよう 「日和田コーン(高根コーン)」(社会資源) 「石仏」(伝統文化資源)	
5年生	総合的学習	秋神じまんを見つけよう 「米づくり」(社会資源) 「わらび粉」(社会資源)	
6年生	総合的学習	野麦を越えた女工たち 野麦峠、女工、歴史(社会資源)	
			郷土学習の出口 社会資源としての「野麦」に かかわって学びを深める

朝日小学校の現在の郷土教育の特徴は、全学年を通じて郷土教育を展開している点にある。特に、総合学習がない1年生及び2年生においても生活科を場として、広く朝日学区の資源に「ふれる」ことをねらいに「郷土学習の入り口」と位置づけ、3年生以降の本格的な郷土教育につなげる工夫がある。その3年生以降については、3年生から5年生の進行で学校統廃合前の旧学区3地域（高根地区・日和田地区・秋神地区）を順に対象として、それぞれの地区の社会資源・自然資源・伝統文化資源を本格的に学習する展開となっている。そして、最終学年の6年生では「郷土学習の出口」として「野麦を越えた女工たち」という一つのテーマを設定し、調べ学習を方法として問題解決能力を育成する発展的な学習を意図している。

しかし、現状ではいくつかの課題もある。それは、第一に郷土教育の全体計画がない点にある。具体的には、郷土教育が学校全体の教育計画の中に体系的に位置づいていない。その意味では、郷土教育が生活科や総合的学習という一つの領域に限定され、教科や道徳さらに特別活動との横断的關係がない。郷土教育は先に述べたように単に体験学習を方法

として愛郷心を育成するものではなく、郷土にあるさまざまな資源（伝統文化資源・自然資源・経済資源）を科学的に学ぶことをベースとしている。その意味では、それらの資源の学習価値はさまざまな教科にも位置づくといえる。

第二に、取り上げるべき教育資源が少ないという点がある。現状では、学年進行で旧学区3地域を順に展開する計画であり、それは朝日学区全体を網羅的に学習する上では効果的である。しかし、郷土教育は地域限定的となり、朝日学区全体で重要性のある教育資源が取り上げられないという欠点がある。さらに、先に述べたように郷土教育は教科等との横断的・総合的な関係を重視するという意味において、教科の視点から教育資源として価値ある郷土資源を対象化しなければならない。

以上のことを考慮しながら、今後に向けて朝日小学校の郷土教育の開発を行わなくてはならない。以下検討する。

（1）郷土教育全体計画図の作成

例えば、以下の図10のような「朝日小学校郷土教育全体計画」が構想される。同計画の作成の手順と留意点は以下のようなものである。

第一に「郷土教育目標」が設定されなければならない。この場合、郷土教育目標を学校全体の「教育目標」の下部に位置づけ、その具現目標であり、重点目標にしなければならない。それは、朝日小学校にとって特色ある学校づくりの重点目標となる。また、郷土教育目標の内容には、高山市教育振興基本計画にある基本的方向4（「子どもたちが誇りを持って語ることができるふるさと『飛騨高山』をめざします」）が反映されなくてはならない

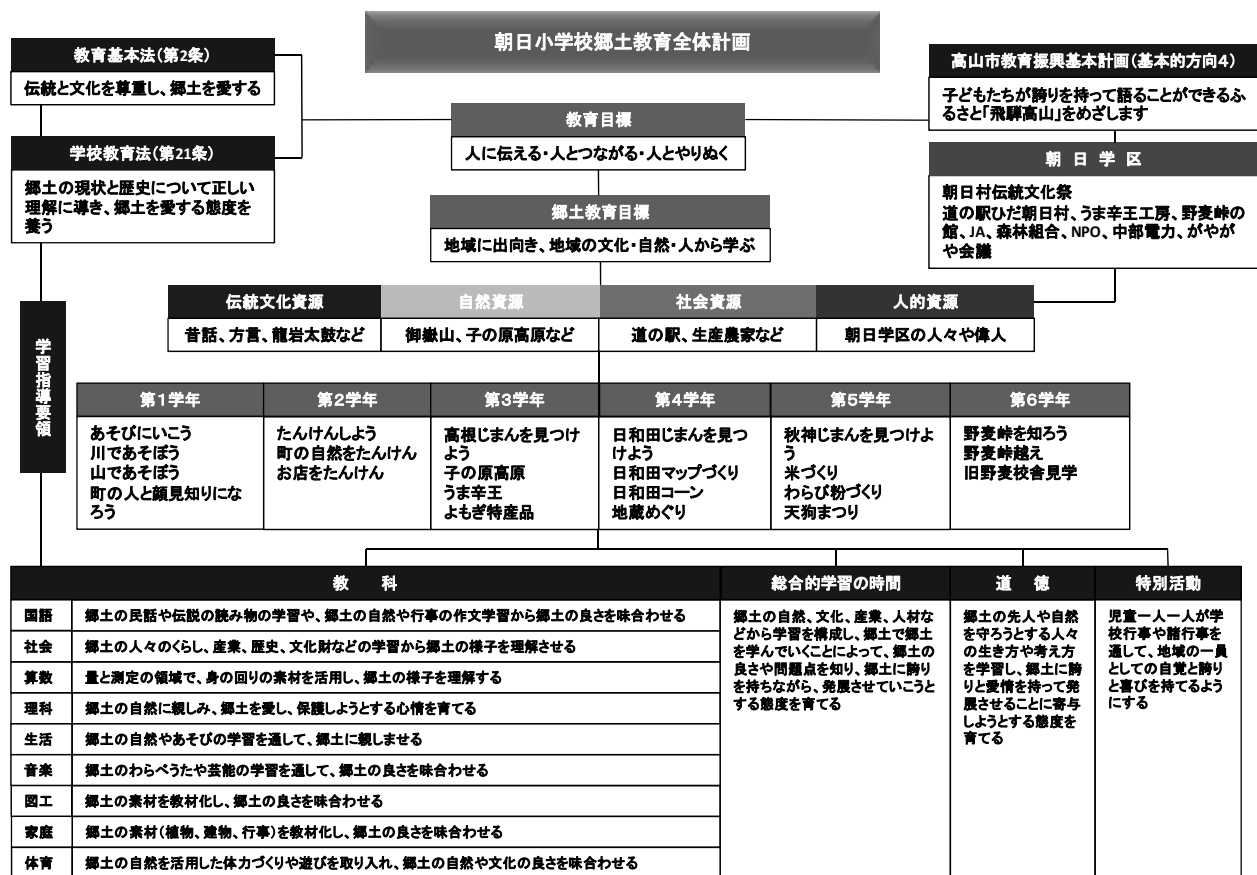


図 10 朝日小学校郷土教育全体計画案

それは逆に言えば、高山市（教育委員会）はその教育振興基本計画の計画及び実施主体としての行政責任において、朝日小学校の郷土教育の実施にさまざまなサポートをしなければならないことを意味する。例えば、郷土教育指導資料や郷土学習のための副読本の作製配布そしてや郷土教育推進のための教員研修事業の新設、さらに郷土教育の展開の時間の確保として各週土曜日の授業日の設定など、学校の郷土教育推進のための条件整備的サポートが求められる。

また、郷土教育目標には郷土である「朝日学区」の現状と意思が反映されなければならない。そのためには、郷土教育の目標づくりの段階で住民の方々の意見が反映され、さらに目標の価値が共有化される必要がある。それは、郷土教育目標が学校の活性化の目標であると同時に郷土・地域である朝日学区の活性化の目標でもあるからである。

つぎに、郷土教育目標の下に「教育資源」として教材化された「地域資源」を位置づけなくてはならない。この教育資源は先にも述べたように「伝統文化資源」「自然資源」「社

会資源」「人的資源」の4領域に及ぶ。これらの教育資源は郷土教育目標を達成するためのリソースであり、同時に郷土の価値を内包する「郷土の宝」である。さらに、それらの教育資源が学習資源として位置づく学年とその単元が表示されなければならない。これらの各学年の位置づけと単元により構成されるフィールドが、郷土教育の実践のフィールドであり、そこに②郷土教育年間指導計画が設定される。

(2) 郷土教育年間指導計画づくり

郷土教育年間指導計画の作成において重要な点は、①学習の時機性と効果を重視した時間計画を行うことと②「教科」「道徳」「特別活動」との連携・横断的な教育課程経営にある。

表6 朝日小学校郷土教育年間指導計画（第3学年）

テーマ	高根じまんを見つけよう
ねらい	身近な地域に関心を持ち、そのよさを見つけていく中で、地域の人々・社会・自然とのかかわりを深め、問題解決能力や自分のふるさとを大切にしようとする態度を育て、自然と遊ぶことで学びを深める。
領域	総合的な学習の時間(60単位時間)
4月	学習の見直しをもつ。「自分の住んでいる地域で自慢できることは何だろう」
5月	見学の計画をたてる。高根地域のイメージマップをつくり、交流する。子ノ原高原の写真を見て計画をたてる(見たいもの、やりたいこと)
6月	地域見学に行く(1回目)。子ノ原高原(レンゲツツジ 見学で見つけたものを発表し合う。) 学習課題をつくる。「春の子ノ原高原で高根自まんを見つけよう」 自然のすばらしさを、そこにひそむわけなどを話し合いで見つける。
7月	地域見学に行く(2回目)。うま辛王 うま辛王の見学を計画する。
9月	地域見学に行く(3回目)。子ノ原高原 学習課題をつくる。「秋の子ノ原高原を探検しよう」 春と秋の違いを話し合って見つけていく。
10月	地域見学に行く(4回目)。朝日の特産物(よもぎ)について調べよう。
11月	学習発表会「学習発表会に向けて、調べた結果をまとめよう」(発表の練習をする。お世話になった方に招待状を書く。)
12月	発表会を通して、今後の在り方を考える。「自分たちにできることはないか考えよう。」 おれいの手紙を書く。

例えば、上記の表6は朝日小学校が現在実践している第3学年の郷土教育年間指導計画であるが、地域見学として予定されている「子の原高原」は春と秋の2シーズンが設定されている。それは、「春と秋の違いを話し合って見つけていく」という発見学習の課題が設定されているためである。また、11月に予定されている学習発表会は地域見学の成果の発表を予定するものであるが、それは単なる発表に止まらず、子どもたちが郷土の資源をどのように理解し、課題を見つけ、どのように継承すべきかを探求した学習成果をまとめる

機会となる。そこでは、郷土学習を通じて、子どもたちが課題を設定し追及する過程が明確化され、自分たちが学んだことを他者へ向けて表現する力の育成が求められる。その意味では郷土学習は「学習発表会」を含めて学習の連続性を持たせる必要があり、その方向で年間の指導計画の時機性が重要視される必要があるといえる。

②「教科」「道徳」「特別活動」との連携・横断的な教育課程経営は、学校全体で郷土教育計画を構想し、体系化する上で重要な課題となる。一般に郷土教育は総合的学習の時間の領域で実施される。それは、総合的学習の時間の領域が、本来地域の人々の暮らし、伝統と文化など地域や学校の特色に応じた課題の学習の領域として設定されているからである。しかし、一方総合的な学習はその領域自体が文字通り教科等の枠を超えた横断的・総合的な学習が求められる領域でもある。

また、郷土教育の教材は郷土にあるさまざまな地域資源であり、その伝統文化資源・自然資源・社会資源・人的資源それぞれは人文科学・自然科学・社会科学的な学習の教材価値を当然に内包している。その意味では、教科としての「国語」「社会」「理科」「音楽」等の教材としての二重の価値を持っているといえよう。その点で、教科指導の観点から郷土資源の教材化と単元化が求められる。その手順は以下のようなものである。①各教科等の年間指導計画の中から、郷土資源にかかわる内容を確認し、抽出する。②各教科等の指導内容の関連を確認し、指導の時期や方法などについて相互の関連を意識して年間指導計画を検討する。③各教科等の年間指導計画に郷土資源に関する指導内容を位置づけ、日々の授業で計画的に実施する。

この場合、特に「社会科」との連携指導は特に重要となる。それは、いわゆる「地域学習」の観点から、「社会科」が「総合的学習の時間」との連携において、郷土教育的な実践を行ってきたという歴史があるからである。この場合、社会科における地域学習は個々の社会事象の意味づけ、社会生活の原則の学習のみならず社会の発展を願う気持ちの育成をねらいとして展開されてきた。また、地域学習は学習指導要領改訂における教育課程の変遷の中では、1950年代まで「郷土学習」として展開されていたという事実がある。その意味では、郷土教育は社会科における地域学習の発展形として、より郷土教育における連携と横断が意識されなければならない。

しかし、一方、社会科の地域学習は教科学習としての限界を持つことも事実である。例えば、課題設定・課題追求・課題解決の学習段階論や「調べ方」や「表現の仕方」といった方法重視の授業設計は、「愛郷心」の育成を重視した郷土教育とは異なるものでもある。また、地域学習が対象とする「地域」は、「身近な地域」と設定されてるが、市町村規模の地理的まとまりを中心とし、いわゆる生活圏としてのムラすなわち生活共同体・文化共同体としての「郷土」ではない。そこに一定の違いがあるといえよう。

以上のように、郷土教育が総合的な学習の時間という教科横断的な領域で行われること、さらにその教材が科学的な学習の価値を内包しているという2点を考えた場合、郷土教育は当然に「教科」「道徳」「特別活動」との連携・横断的な教育課程経営が強く求められる

教育実践となる。

その意味では、その教育課程経営の手順は、①郷土教育の教材となる地域資源を「教科」「道徳」などの領域で教材としてチェックすること。②さらに「教科」「道徳」の学習価値（単元化）の可能性を検討すること。③その上で「教科」「道徳」そして「総合的な学習の時間」を横断する学習価値の連鎖を想定し、各学年という段階と年間計画の二重の時系列の次元でアレンジすることになる。

今後、朝日小学校の郷土教育の指導計画は、「教科」「道徳」「特別活動」と「総合的な学習の時間」のヨコの体系化（横断）と各学年での単元化というタテの体系化（上昇）を意識して、発展的に構想されなければならない（参考資料として文末に載せる（9））。

注（1章から2章）

- (1) 通常の就学指定制度と異なり、市町村教育委員会の判断により通学区域を市町村全域に広げて児童・生徒の募集を特別に行う制度。政策上は行政改革委員会「規制緩和の推進に関する意見（第2次）」（平成8年）や「通学区域制度の弾力的運用について（通知）」（平成9年）により全国的に広がった。現在、その数（該当校）は全国でおよそ300校に及ぶ。
- (2) 本調査は、高山市が昨年に「社会教育による地域の教育力強化プロジェクト」の関連調査として、三菱UFJリサーチ&コンサルティングに委託したものである。なお、調査時期は平成23年11月24日～25日で、インターネットリサーチを方法とする。回答者は東京・名古屋・大阪に居住する大都市住民で回答者数は618名であった。
- (3) 「漂流する日本をどう構築するか」日本青年会議所編『JC 発「教育改革」待ったなし』ぱるす出版 2001年 25頁。
- (4) 衆議院・教育基本法に関する特別委員会 における小坂文部科学大臣の答弁。2006年5月26日
- (5) 第165回臨時国会参議院本会議における安倍首相（当時）の答弁 2006年11月17日
- (6) 参議院・教育基本法特別委員会における小坂文部科学大臣の答弁 2006年11月29日
- (7) 文部科学省「教育基本法の改正に応じた学習指導要領案の主な改訂点」2008年2月15日
- (8) 以下の文献を参考として作成した。朝日村小中学校社会科研究会編著『郷土あさひ』朝日村教育委員会 昭和55年。『わたしたちのたかねむら』高根村教育委員会発行 平成5年。これらの文献は当時朝日村小中学校、高根小学校、日和田小学校、日和田中学校、高根中学校や朝日村教育委員会、高根村教育委員会に所属する先生たちにより執筆・編集された本であり、郷土教育資料として高い価値をもつ。当時の先生たちの郷土資源の分析力と郷土教育推進の熱意に敬意を表したい。

- (9) この朝日小学校郷土教育指導計画案は、下呂市立萩原北中学校の黒木和実先生（岐阜大学教職大学院派遣学生）に依頼し作成していただいたものである。この計画案は本稿の執筆に際して重要なヒントを示していただいた。黒木先生に感謝したい。

追記

本稿は、平成 23 年度岐阜大学活性化経費（地域連携）研究「飛騨高山市の教育振興事業のプログラム開発」（代表；篠原清昭）及び平成 23 年度文部科学省生涯学習政策局委託研究費研究「社会教育における地域の教育力強化プロジェクト」（再委託先：岐阜大学）の成果の一部である。

資料 朝日小学校郷土教育指導計画案

	国語	国工	音楽	体育	理科	家庭
1 2年生	◆朝日地区に伝わる昔話を読もう(伝統的な言語文化に関する事項) 「美女峠」「惣定衛門」「鬼のない狐」「福釜」等 ※『朝日村史第5巻』参照	◆どんなかたちに見えるかな?～小石や木の葉で作ろう～ (内容A(1)ア 身近な自然物や人工の材料の形や色などを基に思いついて作る)	【表現】 ◆いろいろな太鼓で音楽を作ろう(内容A(3)イ簡単な音楽づくり)			
3 4年生	◆ゲストティーチャーをすいせんしょう。 (地域で特技を持った人に学校に来て話してもらうための推薦文を書く) ◆朝日や高根に伝わることわざや言い伝えをしらべよう(ことわざや慣用語、故事成語)	◆自分のかくれ家を作ろう (内容A(1)ア 身近な材料や場所などを基に発想して作る)	【鑑賞】 ◆笛と太鼓でお祭りの音楽を作ろう(内容A(2)ウ旋律楽器及び打楽器の演奏)			◆身近な自然の観察 ・昆虫探ししよう ◆季節と生物 ・動物の活動と季節 ・植物の活動と季節 ◆月と星 ・星の観察しよう
5 6年生	◆朝日・高根に伝わる方言(方言と共通語) ※『朝日村史第5巻』第3章参照	◆自分たちのひみつ基地を作ろう (内容A(1)ア 材料や場所などの特徴を基に発想し、想像力を働かせて作る)	【鑑賞】 ◆朝日と高根に伝わる祭りばやしをくらべて聴こう(内容B(2)ア和楽器を含めたいろいろな種類の楽曲)	【保健】 ◆保健センターの方に、健康な体にするひみつを教えてください(内容G(3)オ地域の様々な保健活動の取り組み)	◆植物の発芽、成長、結実 ◆動物の誕生 ・魚の成長 ◆流水の動き ・川の流れ、川の上流と石 ◆天気の変化 ◆電気の利用 ・中部電力の人に話を聞こう ◆植物の養分と水の通り道 ・農協の人に話を聞こう ◆生物と環境 ・食べ物による生物の関係 ・森林組合の人に話を聞こう ◆土地のつくりと変化 ・火山岩、火山の噴火や地震による土地の変化 ・御嶽山と高根地区	◆地域のる母さん先生から習ぼう ・身の回りの整頓、物を生かす生活、洗剤を使わない掃除術、節約術、汚し(温かく)暮らす工夫 ・家族の健康を守る献立 ・地域の野菜を使った料理や郷土に伝わる料理・保存食 ◆作る人の思いを聞こう(生産農家の人の話を聞く) ◆地域ボランティアの方へのプレゼント作り(小物を作って贈ろう)

	生活科	関係する機関や団体等
1 1年生	1. あそびのこころ (1)わたしの通学路 ◆町の人と顔見知りになる(子ども110番の家、地域ボランティアの方の家、派出所のまわりさんと顔見知りになる) (2)春・夏・秋・冬の遊び ◆【春・夏】川であそぼう・川の石に絵をかこう ◆【夏】夏まつりに出かけよう ◆【春・秋・冬】遊びの達人とあそぼう(おじいちゃん、おばあちゃんから昔のあそびを習おう) ◆【秋】秋とふれあおう・木の葉で遊ぼう・木の葉でつくろう ◆【冬】スキー場に出かけよう ◆【冬】春はくるかな?春をみしに出かけよう 1. 花ややさいをそだてよう ◆ トマト畑やほうれん草畑を見に行こう 2. いきものだいすき ◆ 牛のお世話を手伝おう 3. しあわせいっぱい・もうすぐ2年生 ◆ 学校に朝日保育園の子を小学校に招待しよう ・未来の1年生と一緒にあそぼう ・学校の楽しい場所やおもしろい遊びを教えてください	・子ども110番の家 ・派出所 ・地域ボランティア ・野菜作り農家 ・酪農家 ・朝日保育園 ・地域の高齢者 ・アルピニアスキー場、チャオ御岳スキー場 ・飛騨川 ・朝日の文化祭

	生活科	関係する機関や団体等
2 2年生	1. わたしの町はたからばこ ◆ わたしのすきな場所・町のすてきを発表しよう。 ◆ 町の自然をたんけんしよう ・畑や田んぼ・そば畑・牧場をたんけんしよう ・野菜を作る仕事、牛のお世話をす仕事をやってみよう ◆ お店や工場をたんけん ・お店の仕事をじっくり見よう ◆ みんなが使う場所たんけん ・お店の人や工場の人のお仕事をやってみよう ◆ 道の駅・停留所・郵便局・図書館・公民館・キャンプ場・高地トレーニング場のひみつを見つけよう ・町の安心、見つけたよ(地域のパトロール、押しボタン信号、歩道の工夫など) ◆ 見つけたよ、あこがれの仕事。うれしかった気持ちを伝えよう。 ◆ 町の人にインタビュー ・地域の民話をたずねよう ・朝日・高根に伝わる「言い伝え」を教えてください(例: 天気のことわざ・季節の慣習・野菜や米作りのことわざ・祭りの時のならわしなど) ※3・4年生の国語と重複する可能性あり ◆ 町のあんしん見つけたよ 1. 春・夏・秋・冬の町たんけん(季節の変化・季節の行事を見てこよう) つくってあそぼう ◆ 木や石、植物で作ろう ◆ 畑の先生に教えてもらおう。(地域の農家・野菜作り名人に習おう) ◆ おいしいトマトやほうれん草・高根コーンを作ってみよう ◆ 地域のひとイモ煮会・収穫祭りしよう 3. わたしだいすき ◆ 前の自分はどんなだったかな? 家の人・保育園の先生・近所の人にたずねてみよう	・道の駅 ・個人商店・工場 ・野菜作り農家 ・酪農家 ・朝日保育園 ・郵便局 ・公民館 ・キャンプ場 ・高地トレーニング場 ・寺院・神社 ・地域の高齢者 ・家の近所の人 ・朝日の文化祭

	社会科	総合的な学習
3年生	<p>1. わたしたちのまち・みんなのまち (1)学校のまわり</p> <p>(2)市のような</p> <p>1. はたらく人とわたしたちのくらし (1) 店ではたらく人 ◆ 店ではたらく人の工夫を調べよう</p> <p>(2) 農家の仕事 ◆ 朝日トマト・朝日ほろれん草・高根コーン農家の工夫を調べよう</p> <p>3 かわってきた人々のくらし (1) 古い道具と昔のくらし ◆ 野麦峠の館に行ってみよう ◆ 古い道具を使ってみよう ◆ 道具年表をつくらう (内容(5)ーア 古くから使われていた道具、それらを使っていたころの暮らしの様子) (1) 欲しいもの・伝えたいもの ◆ 朝日と高根に伝わる「たからもの」をしらべよう (内容(5)ーイ 地域の人々が受け継いできた文化財や年中行事)</p>	<p>◆ 道の駅にきた人知ってもらう朝日・高根のいろいろな「イドマップ」を作ろう</p> <p>◆ マップ① 朝日・高根の公共施設と史跡・名所マップ ◆ マップ② 朝日・高根の土地利用と仕事マップ ◆ マップ③ 道の駅周辺マップ ◆ マップ④ 朝日・高根の観光コース ◆ 社会科「地図に表そう」との関連 ◆ 朝日・高根のお店ポスターを作ろう ◆ 朝日・高根の野菜ポスターを作ろう ◆ 社会科「店ではたらく人の工夫」との関連 ◆ 郷土かるたを作ろう ※ 3年社会科で見つけた地域のよさや誇りを継いでいる伝統をかるたにする。 ◆ 高根地区の地域学習 ・「うま幸王(高根)」と「よもぎ料理(朝日)」作り・販売 ・ 根ノ原高原自然体験(夏・秋)</p>

	社会科	総合的な学習
4年生	<p>1. くらしを守る (1) 火事からくらしを守る ◆ 朝日と高根の消防施設をさがそう ◆ 消防団の〇〇さんから話を聞こう (1) 事故や事件からくらしを守る ◆ 派出所のおまわりさんの工夫や苦労はなんだろう？ ◆ 子ども100番の家の人や地域が「ロールの人」から話を聞こう 住みよいくらしをつくる (1) 水はどこから ◆ 水源の森を守る人たちはどんな仕事をしているのかな？ ・ 森林組合やNPOの方から話を聞いてみよう (1) ごみのしよりと利用 ◆ コミ収集車の人にインタビューしてみよう ◆ コミを減らすために、まちの人はどんな工夫や努力をしているのかな？ ・ 近所の人や区長・地区長の人に聞いてみよう きょう土を聞 (1) 山ろくに広がる用水 ◆ 清屋の野中用水を作った人々 ◆ 地いきで学校をつくる ◆ 地いきの文化・産業を調べよう (内容(5)ーウ 地域の発展に尽くした先人の具体的事例)</p> <p>1. わたしたちの県 (2) 特色ある地域と人々のくらし</p>	<p>◆ まちの安全マップを作ろう ・ 警察や消防署以外の消防・防犯に貢献している施設や家の場所を地図に表す。 ※ 社会科「くらしを守る」と関連させる</p> <p>◆ 〇和〇地区での農業体験 ・ 高根コンプレックス ・ 高地レレーン場見学</p>

5年生	<p>1. わたしたちの国土 (2) 国土の地形の特色と人々のくらし ◆ 山あいに住む朝日の人々の苦労と工夫とくらしぶり ◆ 高地に住む高根の人々の苦労と工夫とくらしぶり わたしたちの生活と食料生産 (1) 農業 ◆ 朝日・高根の米作り農家の工夫 ◆ 朝日・高根の野菜作り ◆ 朝日・高根の酪農 ◆ お米が「店」にとくまで (3) これからの農業生産 ◆ これからの日本の農業はどうなるのかな？ JAの人に聞いてみよう</p> <p>1. わたしたちの生活と工業生産 (1) 工業 ◆ 食料品を作る工業 ～「うま幸王」(または「よもぎカレー」)は地いきとどんなつながりがあるのかな？～ 情報化した社会とわたしたちの生活 (3) 情報を生かすわたしたち ◆ 情報は地いきの中でどのように生かされているのだろうか？ ・ 病院、診療所、市役所、消防署などの情報網をしらべ、どんな工夫がなされているかを見つける わたしたちの生活と環境 (1) わたしたちの生活と森林 ◆ 森林の手入れをする人々～森を守る森林組合(NPO、ボランティア)の人たち～ ◆ 森林のゆくみを生かす～川や山の恵みを生かす民営の人たち～ ◆ 森林のはたらきと利用～朝日ダムとわたしたちのくらし～ ◆ 木材を作り出す人々～木材業を営む〇〇さん～ (1) 環境を守るわたしたち (2) 自然災害を防ぐ ◆ 災害を防ぐために地いきの人たちはどんな努力をしているのかな？ 市役所や地域の取り組みをしらべよう。</p>	<p>◆ 秋神地区での稲作(旧秋神小学校の学校田)</p> <p>◆ 私の好きな朝日・高根 ・ スナップ卒業で朝日・高根地区の紹介をする。 ※ 高山市立北小学校での実践を参考</p>
-----	--	---

	社会科	総合的な学習
6年生	<p>1. 日本の歴史 (1) 地域の歴史 ◆ 第2次世界大戦と地いきのふびと わたしたちの生活と政治 (1) わたしたちの願いを実現する政治 ◆ 議員さんはどんな願いを求めているのだろうか？ ◆ 朝日・高根の人たちはどんな願いをもっているのだろうか？</p> <p>3 わたしたちのくらしと日本国憲法 ◆ 市の政治と日本国憲法 ・ 基本的人権と民生児童委員さんの仕事 ・ 基本的人権と選挙管理委員さんの仕事</p>	<p>◆ 野麦峠を知ろう ・ 野麦峠歩き ・ 旧野麦峠舎見守 ◆ 私たちのまち「朝日・高根」を日本一のまちにしよう！ ◆ 私たちのまち「朝日・高根」を日本一のまちにしよう！ ・ 朝日・高根地区を住みよくしている人々を調べよう ・ 日本全国の「日本一のまち」探し ・ 朝日・高根地区に「日本一」と言えるものはないのか？ ・ 提案！朝日・高根地区を「日本一」のまちにする方法</p>

第Ⅱ部 郷土資源の考察と学習価値

第3章 子ノ原高原の自然資源と学習

—無印良品南乗鞍キャンプ場—



1. すばらしさ（魅力）

子ノ原高原は、乗鞍岳と御嶽の眺望がともに楽しめ、夏も涼しい標高 1600mの高原にあります。

豊富な自然があり、県指定天然記念物のレンゲツツジやマツムシソウなどの亜高山帯の植物や山菜などが季節に合わせて楽しめます。また標高が高いことで季節の移り変わりを身近に感じることができます。障害物や電灯がないので星空が美しく天の川が肉眼で確認できるほどです。200 サイト以上もある広大な敷地により日本の中でも有数のキャンプ場です。





2. ふるさと・自然とは

過疎が続く高根地域には自然が豊富です。豊かな自然は普段見慣れている子どもたちには当たり前のことですが、楽しい思い出（遊びなど）を体験させて将来都会にでたとしても、子供の頃、遊んだ思い出などで、様々な郷土を思い出せるのでは亡いかと思います。

3. 子ノ原高原のキャンプ場

子ノ原高原は自然豊かなフィールドであること。高原の別世界である。高根の人々が守り育ててきた大きな自然。私たちが目指したのは、その豊かさと同化するキャンプ場でした。自然の起伏はできるだけ活かし、環境破壊に結びつくような設備はつぐらない。こうしてあがったのが、無印良品南乗鞍キャンプ場です。約30万坪の場内では、フライ・ルアー専用池、MTBコース、露天風呂等、大きな自然と心ゆくまでふれあっていただけの施設が整っています。





4. 子供たちに感じて欲しい・考えて欲しいこと

飛驒の先人は山で暮らし山の利用や楽しみを沢山知っていました。野外で過ごすことで、山の美しさ、楽しさ、厳しさを感じられます。

キャンプは、薪をさがし、火をつけることから始めたり、電気が無くても、食事や暖をとったりでき、生活の工夫やアイデアを考え出す力を養える遊びだと思います。

子ノ原の雄大で貴重な自然を楽しんで覚えて守って欲しい。







5. 郷土教育として子ノ原高原で取り組めること

- ・ キャンプ（設営から食事作りな協働作業）
- ・ はんごう炊飯・バーベキュー（人間力・防災対策）
- ・ 植物観察（実際に花や木々を見ながら）
- ・ さまざまなワークショップ
葉っぱカタログ作り・おかずを手に入れよう・コケ玉づくりなど
様々な体験が可能です。

6. 今後やっていきたいこと

- 都会から来る方に自然のよさや地域の文化を伝えて生きたいです。
- 地元の方に愛され、根ざしたキャンプ場を作っていく地域活性化につなげていきたい
と思います。
- 飛騨や高根の文化を世の中に発信できたらいいと思います。
- より多くの人たちに山や川で遊ぶ楽しみを伝えたいです。
- 自然の中で楽しむことで人との橋渡し役になればと考えています。
- 都会の子供たちと地元の子供たちの交流事業ができればいいと考えています。

7. 事業（無印良品南乗鞍キャンプ場）

●コンセプト

過剰なサービスは省きましたが、自然は豊かです。自然を自然のまま楽しむ。それが無

印良品キャンプ場の基本。テントサイトは自然の起伏を活かしているため、必ずしもフラットではありませんし、ゴミ出しや排水処理についても細かいルールがあります。そのかわり、テントサイトはどこでも車が横付けできるほど大きく、焚き火も自由。愛犬も同伴できるエリアもご用意しています。

他にもフライ&ルアー専用フィッシングエリア・餌釣り池・MTB 専用コースや遊歩道、ドッグランなど様々な野外アクティビティーを体験していただけます。



●アウトドア教室

年間約 80 タイトルの教室を開催します。

自然と仲良くなるための知恵と技も磨けるさまざまなプログラムを用意しています。

外遊びはもちろん、地元の文化や暮らし食文化などを地元の方を講師になってもらい伝えていきます。

●ユーザー登録制

●ショップ・レンタル等

道具が無くてもキャンプが楽しめます。

うっかり忘れ物とした方にも MTB、テントから寝具までと安心していただける品揃えになっています。

第4章 「うま辛王」の社会資源と学習



1. 継続は力なり

学校統合の年（5年前）から朝日小学校の社会見学受入れを行っています。毎年見学時間が多くなり、今年は道の駅と唐辛工房を春秋の二日に分けることになりましたが、アイデアを練って納得のいく内容になり、生徒達にも楽しんで頂けたと思います。担任の吉川先生も熱心で事前学習もできましたので、当日の運びも良かったと思います。

（1）学習の流れ

文末 ①～⑱参照

（2）指導内容

文末 指導の流れ参照

2. 童話言い伝え

街中から子供が一人残らず居なくなった“ハーメルンの笛吹き男”の話。インカの古い言い伝えに“人一人育てるのに村すべての人が必要”という話。社会見学受入れやスクールサポーターで毎朝顔を合わせる子供達を見ていると、未来であり宝である子供達を育てるのは親もちろん学校もちろんですが、学校に通う間も卒業してからもずっと地域が人を育てるのだと思います。古い言い伝えや童話のなかにも現代につながるものがあります。

3. 感じる“つながり”

先生と保護者の距離が遠いと子供は顔色を使い分けます。自己を掘り下げずその場をすり抜ける二面性を使いテクニックだけを覚えてゆきます。社会に出てある程度は通用しますが、自己が形成されておらずやがて社会は敵でしかなくなります。

先生と親が話す姿を子供に見せるとつながりが見え嘘がつけなくなります。都合の悪いことでも逃げられなくなりやがて自己を見つめます。ここに友達の親（一番近い地域の人）祖父母がかかわって親や先生と話す姿を見ると自分たち子供もこのつながりの中に入っていると感じます。つながりは自己を認め自分への自信となり成長してゆきます。

4. コーディネーター

小中学校教育に地域との係わりが増えその内容が濃くなっていくことは素晴らしいことです。私のような受入れ側の“地域の先生”となっていていただいている方々も子供達を大切にしてくださる人達です。今後このような機会を増やし教育の一環となり他の地域あるいは日本中で行われていくのであれば、学校担任と地域の先生の間に入って学校側の授業として成立しうる内容の希望と提供できる地元の人材教材の間に入る調整役、育て役の“地域の先生コーディネーター”が必要になってくると思います。

写真番号 1

場所 朝日小学校 教室
事前学習

【行動・何をしたか】

事前学習①

うま辛王ってどんなものだろう？

【補足】

地元特産品なので知っている生徒も多いが、何を
知っているのか、どんなイメージを持っているのか。

【狙い・心理】

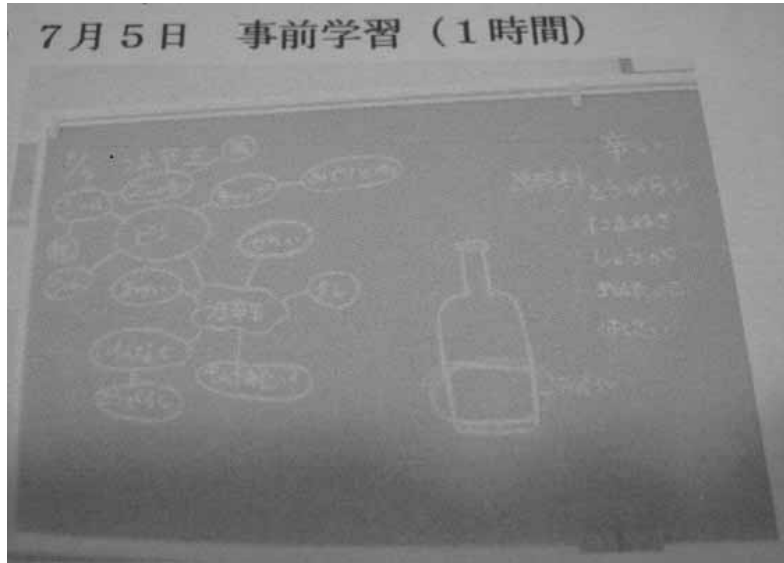
見学前の事前学習で柔らかい発想

【写真の説明】

教室にて

事前学習の黒板の様子

黒板左側に”うま辛王”から連想するイメージが書か
れている



写真番号 2

場所 朝日小学校 教室
事前学習

【行動・何をしたか】

事前学習②

辛い物って何がある？

【補足】

いろいろな辛い食品を出してグループ分けする
売店見学の商品についての予習

【狙い・心理】

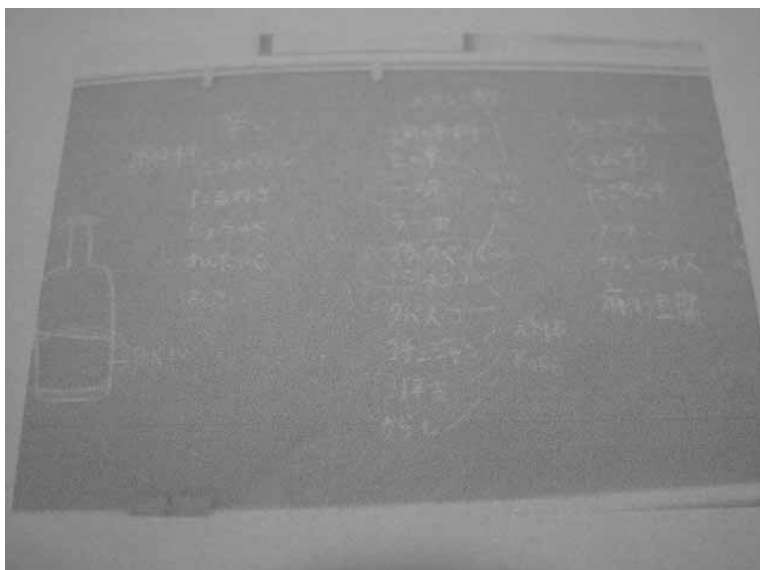
原材料(とうがらし、しょうが)～調味料一次製品(七
味、練からし)～加工品二次製品(キムチ、麻婆豆
腐)へと商品が展開していく

【写真の説明】

教室にて

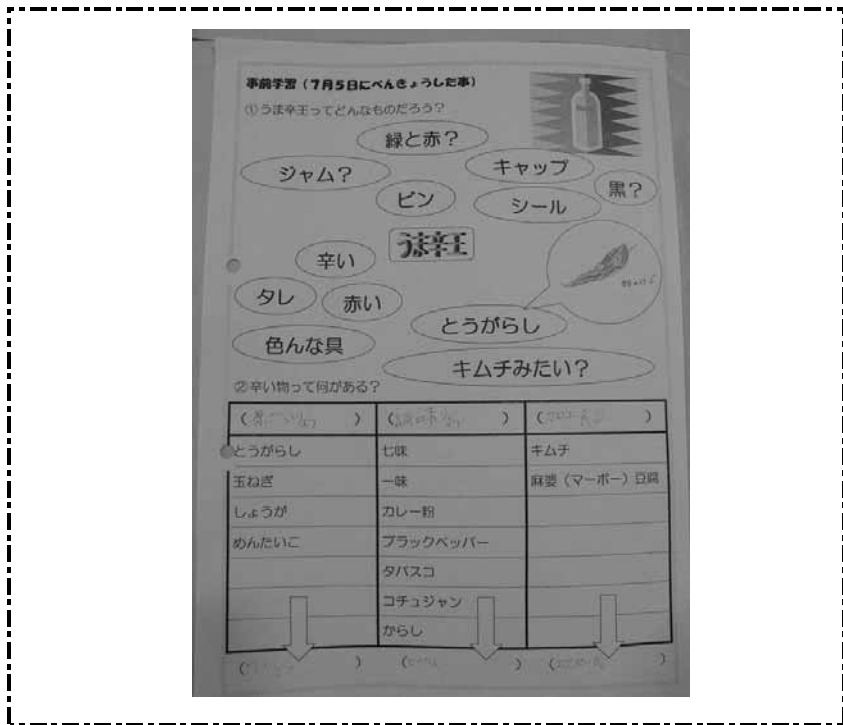
事前学習の黒板の様子

黒板右側に”辛いもの”から連想するイメージが原材
料～調味料～加工食品と分けて書かれている



写真番号 3

場所 朝日小学校 教室
事前学習



【行動・何をしたか】

事前学習③
事前学習”うま辛王ってどんなものだろう?”と”辛いものって何がある?”をプリントにする

【補足】

事前学習の内容と当日見学時に書き込めるプリント

【狙い・心理】

事前学習でイメージしたものと実際に売店に並んでいる商品の比較とまとめ

【写真の説明】

プリント

- ・事前学習の復習
- ・当日見学の内容が書き込める

写真番号 4

場所 道の駅 休憩所
あいさつ・紹介



【行動・何をしたか】

- ・歓迎のあいさつ
- ・うま辛の簡単な説明
- ・事前学習の発表

【補足】

・3年生の生徒達ですが”6年生の一真兄ちゃんのお父さんです”と話し、親近感を持ってもらう

- ・うま辛の簡単な説明

【狙い・心理】

柔らかい雰囲気づくり

【写真の説明】

話しをしている様子

写真番号 5

道の駅 売店
場所 うま辛王探し



【行動・何をしたか】

- ①売店にあるたくさんの商品の中から”うま辛王”を探す
- ②”うま辛王”の入った商品を探す

【補足】

- ①”うま辛王”という商品を見つける
- ②”うま辛王”の入った商品を探す

【狙い・心理】

”うま辛王”という調味料からその入った二次商品ができる

【写真の説明】

・”商品の説明書きを見るとわかるよ”と説明したので真剣に見ている

・先生も一緒に探している

写真番号 6

道の駅 売店
場所 うま辛王探し その2



【行動・何をしたか】

”うま辛王”の入った商品を探す

【補足】

・”この商品棚にあります！”とヒントを出す。

【狙い・心理】

・飽きさせないように工夫する

【写真の説明】

・生徒も教授も探している

・真剣に取り組んでいて雰囲気がとても良い

写真番号 7

道の駅 売店
場所 うま辛王探し その2



【行動・何をしたか】

”うま辛王”の入った商品を探す

【補足】

・”うま辛王”は唐辛子からできている

【狙い・心理】

- ・うま辛→辛い！ 辛い→うま辛？
- ・同じ原材料から異なった商品が生まれる

【写真の説明】

- ・”七味唐辛子のピン”の前で相談している
- ・事前学習が役立っている

写真番号 8

道の駅 売店
場所 うま辛王探し その2



【行動・何をしたか】

”うま辛王”の入った商品を探す

【補足】

・”うま辛王”と書いてないが”うま辛王”が入っている商品がある

【狙い・心理】

- ・商品ラベルと原材料説明を読む

【写真の説明】

・この商品は表に”うま辛王 ポン酢”と書いてありそのラベルを見ている

写真番号 9

場所 道の駅 食堂
原材料の説明 唐辛子の種類



【行動・何をしたか】

・3種類の唐辛子の説明

【補足】

・3種類それぞれの特徴
・その土地に適した種類

【狙い・心理】

・普段見たことのある種類や初めて見るもの

【写真の説明】

・普段よく見る“鷹の爪”と呼ばれる 左皿 乾燥
・袋から出した2種類 右皿 塩漬け

写真番号 10

場所 道の駅 食堂
原材料の説明 唐辛子の説明



【行動・何をしたか】

・製品の材料としての説明

【補足】

・どれが“うま辛王”の材料か
・全部使うのかどの部分を使うか

【狙い・心理】

・材料と製品のつながり
・材料が製品となっていくイメージ

【写真の説明】

・大きさの違いより果肉が厚くなりうまみがでる
・どこが辛いのか
を、説明している

写真番号 11

場所 道の駅 食堂
原材料の説明 製品の説明



【行動・何をしたか】

- ・売店の商品説明表を見せる
- ・辛さの違う商品がある

【補足】

- ・一つの材料から数種の商品が生まれる

【狙い・心理】

- ・消費者のニーズに合わせた商品(辛さの違い)

【写真の説明】

- ・商品説明の表を見て、スケッチする商品の辛さの度合いを調べている

写真番号 12

場所 道の駅 食堂
スケッチ 唐辛子・うま辛王



【行動・何をしたか】

- ・原材料の唐辛子
- ・うま辛王のビン、ラベルの、スケッチをする

【補足】

- ・事前学習プリントにスケッチを書く

【狙い・心理】

- ・スケッチすることでより観察する

【写真の説明】

- ・唐辛子の大きさ(センチ)を計っていた

写真番号 13

場所 道の駅 食堂
試食 うま辛王2種類



【行動・何をしたか】

- ・うま辛王2種類を試食
- ・色の観察
- ・匂い
- ・感想をノートに書く

【補足】

- ・それぞれを白い皿に出す
- ・ピンから出る様子、皿の上の液体色合い

【狙い・心理】

- ・色を見る、匂いを嗅ぐ、すぐにノートに書く
- ・五感で観察

【写真の説明】

- ・それぞれの匂いの違い
- ・匂いの違いをノートに書くことが難しく面白い

写真番号 14

場所 道の駅 食堂
試食 うま辛王2種類



【行動・何をしたか】

- ・うま辛王2種類を試食
- ・味
- ・感想をノートに書く

【補足】

- ・それぞれを白い皿に出す

【狙い・心理】

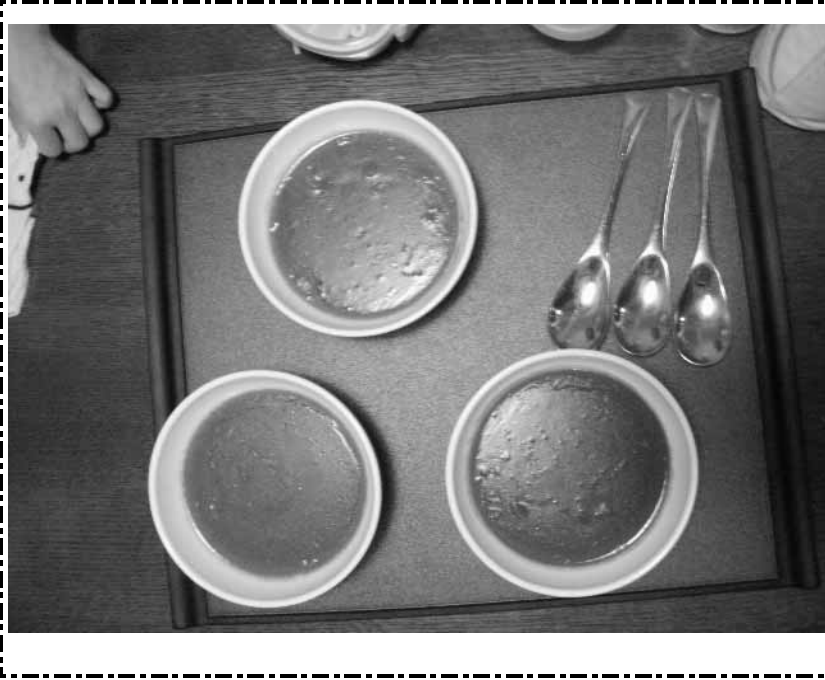
- ・味見をする すぐにノートに書く
- ・五感で観察

【写真の説明】

- ・辛いのでつまようじの先に付けてなめる

写真番号 15

場所 道の駅 食堂
試食 うま辛王カレー



【行動・何をしたか】

・うま辛王を使った商品のカレーを試食

【補足】

・辛さの違う2種類のカレー

【狙い・心理】

・カレーの味の中に”うま辛王”の味があるか

【写真の説明】

・左上、左下が中辛

・右下が辛口

・上に写っているのは生徒がそれぞれ持参したごはん

写真番号 16

場所 道の駅 食堂
試食 うま辛王カレー



【行動・何をしたか】

・うま辛王を使った商品のカレーを試食

【補足】

・辛さの違う2種類のカレー

【狙い・心理】

・カレーの味の中に”うま辛王”の味があるか

【写真の説明】

・楽しい試食会

・先生方も終始生徒と同じように見学に参加いただき
良い雰囲気

写真番号 17

場所 道の駅 食堂
終わりのあいさつ



【行動・何をしたか】

【補足】

【狙い・心理】

【写真の説明】

・楽しく社会見学できましたありがとうございました

写真番号 18

場所 朝日小学校
ポスター 番外



【行動・何をしたか】

・子供達が"うま辛王"のポスターを書いてくれました

【補足】

【狙い・心理】

【写真の説明】

・製品の製造過程、特徴を掴んでいます

道の駅飛驒たかね工房 社会見学 指導の流れ

見学者：高山市立朝日小学校3学年

場所：道の駅飛驒たかね工房内 情報発信休憩所・売店・食堂（試食含む）

日時：平成23年7月7日

見学対象：うま辛王および関連商品、これを販売する売店、食堂（試食）

“うま辛”とは唐辛子を原材料とする液体辛味調味料“うま辛王”（商品名）の主成分を指しています。

地元の先生：市原秀久（道の駅飛驒たかね工房駅長）

補助・進行：吉川 奈理 朝日小学校3学年担任

場所	写真	行動・何をしたか	補足	狙い・心理	
打合せ		見学日程	春：道の駅 秋：製品充填工場、貯蔵トンネル		
		見学内容	道の駅：売店、食堂にて原材料・一次製品調味料・二次製品の説明、試食		
	3	準備・プリント作成	事前学習とその内容	事前学習・	
事前学習	1	事前学習①うま辛王ってどんなものだろう？	食べる？飲む？塗る？袋？ピン？青？赤？黄色？	地元特産品なので知っている生徒も多いが概要を掴む	
	2	事前学習②辛い物って何がある？	いろいろな辛い食品を出してグループ分けする	原材料（とうがらし、しょうが）調味料（七味、練からし）・加工品（キムチ、麻婆豆腐）	
休憩所	導 入				
	4	挨拶・紹介	地元の子供達を歓迎する	挨拶、柔らかい雰囲気作り	
	10分	生徒による事前学習の発表	“辛い食べ物調べ”担任の先生と事前打合せの内容	予測することで興味が湧く	
		“うま辛”の簡単な説明	唐辛子を原料にした辛い液体	後の展開のため、辛いということだけ簡単に話す	
う ま 辛 探 し					
売店	10分	うま辛探し	陳列してあるたくさんの商品から“うま辛”の入った商品を探す	場所を移して飽きさせないようにする 商品パッケージから情報を読み取る	
		各班に分かれて売店の中を自由に探す	うま辛の入った商品がどれか探しましょう！	先生も加わりワイワイガヤガヤ楽しい雰囲気ができる	
	15分	ヒント その1を出す	“うま辛”と書いてないが入っている商品もある！	見方、探し方の変化	
		ヒント その2を出す	うま辛は唐辛子から出来ているが、唐辛子が入った商品がうま辛の入った商品ではない	商品表示、原材料名を見る。唐辛子＝“うま辛”ではない 材料と製品の違い “うま辛は製品”	
	商 品 説 明				
	10分	生徒による発表	各商品棚ごとに生徒に発表してもらう	自由に意見感想を言い易い雰囲気をつくる 事前学習と重なる商品も出てくる	
商品説明		①ズバリ“うま辛”と書いてある商品 ②“うま辛”と書いてないが入っている商品（原材料名で確認） ③原材料に唐辛子と書いてあるが“うま辛”は入っていない商品	各商品棚ごとに商品を手に取って見せて説明 思わぬ商品あったりで楽しい雰囲気		
食堂 (個室)	原材料・製造の説明				
	30分	原材料（唐辛子）の説明	唐辛子の種類（3種）を見せる。 普段見たことがあるものや初めて見るもの（大きさ、色）	観察しそれぞれ絵を書く 大きさや色の違い	
		なぜ種類があるか	それぞれの土地に適応した種	地元の気候、環境を考える	
		どれが“うま辛”の材料か	その土地で取れた農産物とその特徴を生かした製品作り		
	30分	唐辛子の説明	種（内側の種・種を包む繊維）がより辛い→工場でも種を含め貯蔵	肉厚な種類はうまみがある	
		製造の説明	製造工程を売店用商品パネルを使って説明	秋の社会見学で製造工場、熟成トンネルに行く事前学習となる	
	30分	重要な“熟成”について説明	使われなくなった山合いの旧国道廃トンネルを熟成庫にしている 一年を通じて温度湿度の変化幅が少なく特に夏場の温度上昇が少ない	地元の気候、環境を利用 貯蔵庫（トンネル）を長年していると熟成する条件がさらに安定し（発酵菌の繁殖）他で同じ味が出せなくなる（酒蔵、味噌醤油など）	
試 食					
60分	試食その1 主力商品（一次商品） “うま辛”の主製品のうち2種類の液体辛味調味料の試食	商品名 “うま辛王・うまっ辛ぽっど” の中身を“目の前で”白地の皿に出す。 色・匂い・味印象をそれぞれノートに記録。	特徴を掴むため観察（液体の性質の違いが判るよう目の前で見せる）		
	試食した商品それぞれの説明	辛さの強い商品、辛さまろやかな商品	消費者のニーズ（好み）に合わせた商品の種類		
	試食その2 派生商品（二次製品） “うま辛”の入った商品の試食	甘みそのうまっ辛仕込み	商品展開 ひとつの素材からいろいろな商品が生まれる		
		うま辛みそらーめん（スープのみ）			
お弁当（白ごはんのみ）持参	うま辛王カレー（辛口）・たかねカレー（中辛）	3年生なので辛味に弱い生徒もいるため中辛も試食			
工 場 見 学					
工場外	10分	隣接する充填工場の外へ	窓越しに工場内を見て秋の見学について説明する	次回の見学につなぐ	

第5章 朝日特産物「よもぎ」の社会資源と学習



1. よもぎ

よもぎは日本全国いたるところに自生しています。キク科の植物です。地下茎がやや横に這い、集団を作って育ちます。葉は大きく広がり、裏面には白い毛が生えます。

夏から秋にかけて、茎を高く伸ばし、目立たない花を咲かせます。特有の香りがあり、香りの主成分はシネオール、ツヨン、 β -カリオフィレン、ボルネオール、カンファー、脂肪油のパルミチン酸、オレイン酸、リノール酸、ビタミンA、ビタミンB1、ビタミンB2などです。

一般には春につんだ新芽を茹でて、おひたしや汁物の具、または草餅にして食べます。また、天ぷらにして食べることもできます。食物繊維はほうれん草の10倍近くあります。また、良質のクロロフィル（葉緑素）やビタミンを豊富に含んでいます。そのため、よもぎは『ハーブの女王』と呼ばれるほど、その効能は絶大で、飲んでも、付けても、浸かっても、嗅いでも、燃やして（灸のもぐさとして）も良しの五拍子揃った薬草で、『病を艾（止）める』という意味から、漢方名では艾葉（ガイヨウ）と呼ばれ、その効能や栄養価の高さから、万能薬とも言われる程です。



よもぎの花

2. よもぎうどん

冷たくて喉ごしのいいよもぎ入りのざるうどんです。
山菜天ぷら付きで950円。お口の中に入れる
とほのかによもぎの香りのするとってもフルー
ティなざるうどんです。



麺は緑色に輝き、シコシコ、つるつるの一本筋の通った美味しいうどんです。太麺はあたたかいうどんで、細麺はざるうどん等でお召し上がり下さい。



使用するよもぎは、朝日町で春一番に採れた新芽を使います。

【作り方】

- ①まずは解凍します。それをミキサーで細かくします。
- ②それに小麦粉・デンプン・塩水を加えて生地を作ります。
- ③その途中で細かくしたよもぎを混ぜます。

④よく練ったら、よもぎうどんの完成です。

3. よもぎの収穫

Q：よもぎの収穫はいつ行われますか？

A：5月上旬のゴールデンウィークが過ぎた頃から、摘み始めます。

Q：どんなよもぎを収穫するのですか？

A：若芽といって新しく出たばかりのやわらかい芽のみをていねいに摘みます。

Q：どこで収穫しますか？

A：収穫する場所は、朝日町内にある休耕田です。

Q：よもぎは種をまいて育てるのですか？

A：田んぼに生えている自然のよもぎを摘みます。

Q：道の駅の方々が収穫しているのですか？

A：朝日町の方々にお願いして摘んでいただいています。

Q：どれくらい収穫するのですか？

A：一年間で約300kgです。

Q：収穫したよもぎをどうするのですか？

A：①手作業で質のよいものだけをていねいに選びぬきます。

②選ばれたものだけを熱湯でゆで、アクをとります。

③それを天日で干します。

④乾燥したものを袋に詰め、冷凍保存して使用します。

4. よもぎを使った商品

○元祖飛騨よもぎうどん

- ・太麺
- ・細麺



○よもぎ焼酎



○こめっこ餅 (よもぎ)



○よもぎ餅



○よもぎみたらしだんご

○よもぎカレー

○よもぎ豆腐

○よもぎ五平餅

- よもぎ大福餅
- よもぎ最中アイス

5. よもぎと朝日町

私達は、道の駅ひだ朝日で「よもぎ」を使った特産品を中心に飛騨高山の特産品をみなさんにお届けしています。

ここには、春は桜、花、夏は避暑地に、秋は紅葉、冬は寒さを生かした氷のイベントと四季様々なよさがあります。朝日のよさはやはりこの自然です。そしてその自然のよさの一つに「よもぎ」を使った特産品があります。

私達は、この朝日でとれた「よもぎ」の素晴らしさや、「よもぎ」に関わっている朝日の人たちが持っている、心の素晴らしさをより多くの方に伝えていきたいと思えます。

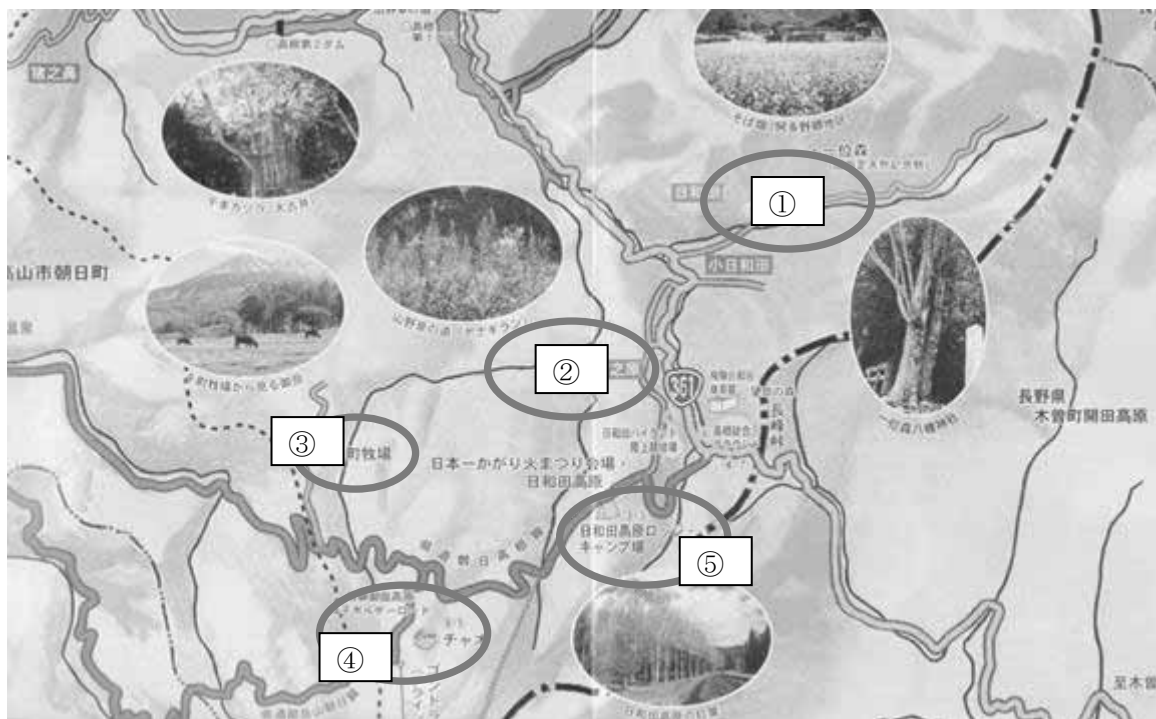


【クリスタルライブひだあさひ】

第6章 日和田マップ



日和田にはよいところがいっぱいです。
この地域の人もいろいろなことに頑張っています。皆さんにもぜひ知っていただきたい
と思います。



- ① 高地トレーニングセンター
- ② 火畑ソバ
- ③ 千町牧場
- ④ チャオスキー場、高地トレーニングセンター

⑤ 日和田高原

① 飛騨高山御岳トレーニングセンター

飛騨御嶽高原は、御嶽山麓北西側に位置し、比較的緩傾斜な台地が展開する地域です。標高 1,200～2,200m にかけて広がる高原地帯であることから、高地トレーニングに適しています

飛騨御嶽高原高地トレーニングエリア内に位置する旧日和田小学校を、医科学トレーニング機能及び宿泊機能を有した拠点施設として整備し、高地トレーニングの推進及び健康増進並びに地域の活性化を図っています。



② 火畑ソバ



現在の日和田地区に古くから伝わるお蕎麦で、標高1000mを越える高い場所で育てられています。育てる場所が少なく、収穫する量が少ないことから数量限定の貴重なお蕎麦になっています。

この火畑そばが作られている場所は、寒い場所ということもあり、そばの実がぎゅっとしまり、比較的小さめなのが特徴です。

『望嶽の菴』（ぼうがくのいおり）

御嶽山と乗鞍岳の山間に位置する高山市高根町のお蕎麦屋さん。

南に御嶽山、北に乗鞍岳が一望できるロケーションです。

自家栽培、石臼挽きによる自家製粉、限定販売の徹底的にこだわったお店で、店構えは古民家を移築し、白壁と水車が回っています。

③ 千町牧場



千町牧場からは、御岳、乗鞍が一望でき、のどかな光景が広がっています。春から秋にかけては飛騨牛が放牧され、秋から冬は農家の家に戻るといふ夏山冬里方式がおこなわれています。

昔の広さの単位で、「千町位広いぞ〜」ということから千町牧場となつたらしい明治時代からの牧場です。手の届くような近くに御岳、乗鞍があります。



④ チャオスキー場、高地トレーニングセンター

既に一般道や既存施設を活用した高地トレーニングが実施されています。県道改良も進み、標高差を使い分けることでスポーツ選手の身体能力向上・強化はもとより、一般の来訪者や地域住民の健康増進など、多彩なトレーニングメニューを組み立てる事が可能です。



⑤ 日和田高原



第7章 タカネコーンの社会資源と学習



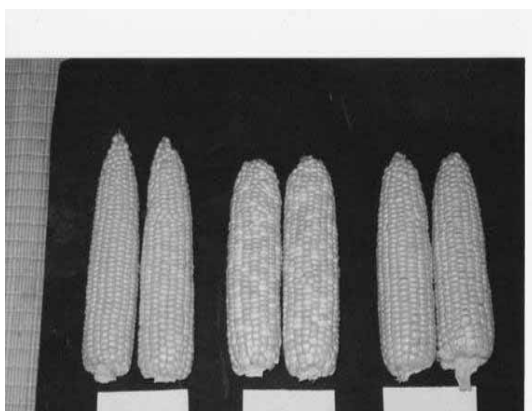
1. タカネコーンとは

- (1) 私達がタカネコーンを作っている畑は、標高が1,200m～1,300mと高いところにあります。

昼夜の寒暖の差とカウマンションや各畜産農家で育てられている飛騨牛の完熟堆肥による土づくり、そして農家の愛情が美味しいタカネコーンを育み、糖度は何と15度以上。生で食べても甘く、メロンに匹敵する甘さです。



(2) 品種は「ピーターコーン」という種類です。粒が大きく、丸いのが特徴です。



【上の写真、左から「キャンベラ90」「ピーターコーン」「味来90」】

(3) タカネコーンという名は、トウモロコシの「コーン」と『高根へ来ませんか?』という言葉を合わせ、『高根へ来ませんか?』→『高根来一ん?』→『タカネコーン』となりました。タカネコーンを通じ、たくさんの人にこの地域を訪れてほしいという願いが込められています。

2. タカネコーンの育て方の工夫

Q：種はどうしていますか？

A：毎年種のお店から買って、それをまいて育てます。

Q：どうしてこの種にしたのですか？

A：いろいろな種を試して、最終的にこの種に決めました。寒さに適応し、甘い実ができたからです。

Q：育てる上での工夫を教えてください？

A：①タカネコーン生産組合の規約に沿った作り方でなければなりません。

②飛驒牛の堆肥でを使って、水はけがよくて栄養豊富な土を作ります。

③糖度を増すために、日当たりが良くなるように畝をつくります。

④1本の茎には、1本の実しかつくりません。それは1本の実に栄養を集めて甘くするためです。

⑤収穫の時期を見極めて、一番甘い時に収穫します。



3. タカネコーンのオーナー制度、宅配制度

平成7年からタカネコーンのオーナー制度を始めました。実施している農家は5軒です。オーナーには1区画（30本のトウモロコシが植えられています）を、7,000円で所有していただきます。オーナーは全国にみえますが、高山を含め東海地方の方が多いです。

当初は役場の方、JAの方、青年部の方、国際ワーキングキャンプ（ナイス）の方々にお手伝いいただき、収穫時期にオーナー交流会を行いました。看板の作成、交流会のサービスなどの準備をしました。400人くらいの方が収穫にみえました。

その後、お客さん同士の口コミでひろがり、多い時には800人以上の方がみえました。絶叫大会や魚のつかみ取りなどのお楽しみ企画もおこないました。

今は収穫のみを行っていますが、土日の2日間で700人～800人くらいの方がみえます。

年度	オーナー数
H 7	1 8 0
H 8	2 0 0
H 9	2 0 4
H 1 0	2 1 0
H 1 1	2 1 3
H 1 2	2 2 0
H 1 3	2 2 8
H 1 4	2 2 0
H 1 5	2 3 1
H 1 6	2 4 2
H 1 7	2 5 0
H 1 8	2 4 5
H 1 9	2 5 5
H 2 0	2 7 0
H 2 1	2 8 0

宅配制度も 2 5 軒の農家が実施し、日本全国へ出荷しています。



4. 小学生の体験学習

小学生が体験学習でタカネコーンを栽培します。できればやらせたいことはたくさんあります。しかし、時間があまりないので以下の3つを体験してもらいます。

① 種まき（5月中旬か下旬）

- ・ 1区画ごとにマルチをかぶせ、そのマルチに10センチほどの穴をあけておきます。
- ・ そこに人差し指で2センチほどの穴を2個掘ります。
- ・ その穴に1個ずつ種を入れて、土をかぶせます。

② 間引き

- ・ 2個植えたうちの、育ちのいいほうを残し、1本を取り除く。
- ・ 脇芽が出ていたらそれを取る。

③ 収穫（8月下旬）

- ・ 幹をいためないように押さえてとうもろこしを取る。

5. タカネコーンの栽培での工夫

少しでも多くの方に美味しいとって喜んでいただくために、次のようなことをしています。

- ① いのししや小動物にトウモロコシを取られないように、でんきが流れる柵を張っています。
- ② 1本のトウモロコシの幹に2個の実がつくので、1個の実にするようにしている。
- ③ 台風がきて幹が倒れたときにはすぐに起こしてやる。
- ④ 県のクリーン農業の指定のため、消毒や農薬が少ないので、草取りをこまめに行う。
- ⑤ 化学肥料でなく、堆肥を与える。

6. タカネコーンを栽培して

タカネコーンの育て方には自信と誇りを持っています。この種はどこで育てていただいても構いません。でも、日和田で育てたようには美味しくはなりません。朝日の小学生にも種をあげて家で育ててもらいます。でも、タカネコーンみたいに甘くはなりません。やはり、この自然と、堆肥で大切に育ててこそそのタカネコーンです。

オーナーさんや宅配契約の方から「おいしかったので、これからも是非続けてください」というような励ましをいただくと本当にうれしいです。しかし、自然の物ですから時には不作品もできます。そういうときには率直に「おいしくなかった」という声をいただきます。それもさらに頑張るための糧になります。

今後もおいしいタカネコーンを作り続けていきます。

第8章 日和田の石仏めぐり



はじめに

私達の住んでいる日和田地区には、農地や山の斜面、小高い丘や小道のあちらこちらに、たくさんの石仏が何気なくたたずんでいます。

気をつけて見ないとわからないような小さなものから、表情まで伝わるほどよくできているものまで、いたるところにあります。

どうして、日和田にはこんなにもたくさんの石仏があると思いますか。私達は小さい頃からこの石仏があることがあたりまえのようにして暮らしてきました。この石仏のことを見ていくと、日和田のいろいろなことがわかります。

ぜひ皆さんにも、日和田の石仏のことを知ってもらい、日和田のことをよりいっそう好きになってもらいたいです。

1. 石仏とは（種類）

石仏（せきぶつ）とは、石に彫られた仏像や道祖神などの神像なども含めます。小道や田畑の傍などで見られるような小さいものから、岩山に掘られた大きな物まであります。

昔は農業をする際には常に天候に左右されることが多く、何をするにつけても神様や仏さまに頼ることが多くありました。集落には神社以外にも多くの守護神をお祭りして、豊作を祈り収穫や健康を感謝しました。また、馬や牛などの家畜についてもその健康を願ったり、働きに感謝をするために、馬頭観音や牛頭観音を祀りました。そういった人々の生活における祈りが石仏になりました。

<石仏の種類について>

馬頭観世音 昔は馬と人は同じ家の中に住んでいました。馬は家族の一員であり、とても大切にされました。春と秋の年に2回、馬の健康を保つために、爪切りと血を抜くことをしました。各集落では、それを行う場所が決められていました。そこを「血取場（ちとりば）」と呼んでいました。そこには馬頭観世音があります。日和田には原家という大きな馬大尽があったため、馬頭観世音が多いです。



牛頭観世音 (ごずかんぜおん) 昔、病虫害に悩まされていた農山村で疫病を止める神様として大切にされました。また、牛神さまとしても祀られました。留之原には牛頭観世音・牛頭大王が多くあります。

妙見神 馬を守る神様です。また、農作の神様でもあります。高根地区では、霜の害や風の被害から守る神とされ、高い尾根から集落を見下ろす位置に祀られています。



愛宕神 地区の境を守る神、または防火の神様として有名です。日和田には馬山によい石仏があります。

不動明王 常に大きな炎の中に座って、全ての煩惱を克服しようとしている神様です。眼が怒っていて左目は細く閉じていて、唇をかみしめています。右手に剣を持ち、左手に索を持っています。

大日如来 真言密教のご本尊です。世界を照らし全ての生き物の成長の元となる母とされています。日和田地区では集落の守り神として高いところで集落を見守る位置に立っています。



弘法大師 真言宗の開祖、空海のことです。わらび粉作りは弘法様が教えて下さったという伝えがあり、わらび粉作りに関係がある所には多くあります。

田の神 稲の豊作を祈る神様です。女神様が多いです。稲作があまりできなかった日和田にもこの石仏があります。

山の神 山を支配する神様です。男神と女神とあります。日和田には男神です。祭りの日には山の神様も祭りをするので山仕事を休みました。

道祖神

悪霊が集落に入って来るのをさえぎって境を守る神様です。また、旅の安全を守る神様として、村はずれや峠などに祀られました。



地蔵

地蔵菩薩のことです。昔の厳しい自然の中で死んでいくことがあった旅人の霊を安らかに眠らせるために、日和田には多くの地蔵菩薩があります。

覚明行者

御嶽山が昔から信仰の山でした。その御嶽山に登るには昔は100日かかりましたが、それを75日でできるようにした人です。また、稲作について指導を行い、村人から信頼されました。



秋葉様

火事から守ってくれる神様。

2. 日和田の歴史と石仏

Q：日和田にはどれくらいの石仏がありますか

A：約550体以上あると言われていています。最近になって発見されるものも
あります。

すべてを見てまわるとすると、2日はかかります。

Q：いつの頃、誰によって作られたのですか

A：江戸時代の末期～昭和時代の初期にかけて作られています。

作らせた人は、当時の偉い人であったり、庶民であったりしますが、実際に掘った人は、長野県から来た石工さんたちといわれています。長い間日和田地区に滞在して作ったといわれています。ほとんどの石仏には、作った年代や掘った人の名前などが刻まれているので、調べることができます。

また、石仏には御嶽山の噴火で飛んできた石が使われています。加工がしやすかったということです。



石仏に刻まれた、年号や作者名
を調べます

A：なんのために石仏を作ったのですか、朝日や高根にはあまりないのに、
どうして日和田にはたくさんの石仏があるのですか

Q：石仏は最初のところにも書いたように、神様や仏様に何かをお祈りしたり、
感謝の気持ちを込めるときに作りました。

①日和田は高根や朝日地区よりも禅宗が盛んだったことから、石仏を

作ってお祈りすることが盛んに行われたといわれています。

②また、御嶽山信仰が強く、御嶽山への思いを込めて作られた石仏もたくさんあります。

③さらに、日和田には木曾馬が多く飼われていました。馬の健康を祈り、感謝することなどから、多くの石仏が作られました。馬頭観世音が多いことから、日和田と馬の関係の深さがわかります。このことはあとで詳しく書きます。

このようなことから、日和田には他の地区にはないような石仏がたくさんあります。

では、日和田と馬の関係について書きます。

<日和田の馬大尽・原家>

日和田のことを語る時に欠かせないのが「原家」です。今では屋敷の家垣しか残っていませんが、それでも大きな屋敷であったことがしのべれます。



原家跡



原家の前の石仏群

日和田に原助次郎という人がいました。

1839年～1927年に生きた方です。

日和田に大邸宅をかまえ、多くの木曾馬飼っており、また、開田村にはたくさんの田んぼも持っていて、「日和田の馬大尽」と言われていました。原家に関する多くの資料はないものが多く、詳しく知ることは難しいのですが、江戸時代からの大農家であり、明治時代には長者番付にも載っているくらいの、大金持ちであったとされています。

○馬市に出す馬の列の先頭が木曾福島の市に到着したころ、列の最後尾はまだ原家を出ていないくらい長い馬の列だった。

○商家（農民）であった原家が木曾の代官にまでお金を貸していた。

原家がある日和田は標高が約 1000 メートル以上の高地でした。冬はマイナス 20 度くらいまで下がる土地であり、米作りには向きません。住民は木曾馬を飼い、運搬につかったり、肥料に使ったり、市で売ったりして、生活に生かし収入源にもしていました。

木曾馬は小柄な割には力がありましたし、食料はそれほどよいものを与えなくてもよく働いたので、日和田地区にはもってこいの馬でした。日和田だけでなく、この飛騨の地は峠を越えて塩やブリを運ばなくてはならず、飛騨の生活を支える上で木曾馬は大活躍しました。また、性格が優しく人に慣れたので、家族のように愛されていました。

そんな中で、原家は馬を大量に保有し、住民に貸したり、生まれた子馬を 売って大きな財産を手にしていったそうです。「原家の木曾馬を大事に飼っていたら、貧乏にはならない」と、当時の住民は言っていました。国としても、戦争などの軍事にも運搬などで馬が必要とされたり、馬の役割が増し、馬の改良が進むなど、馬を保有する人の重要性が増していった時代でした。1900 年ころは原家も全盛期を迎えていました。

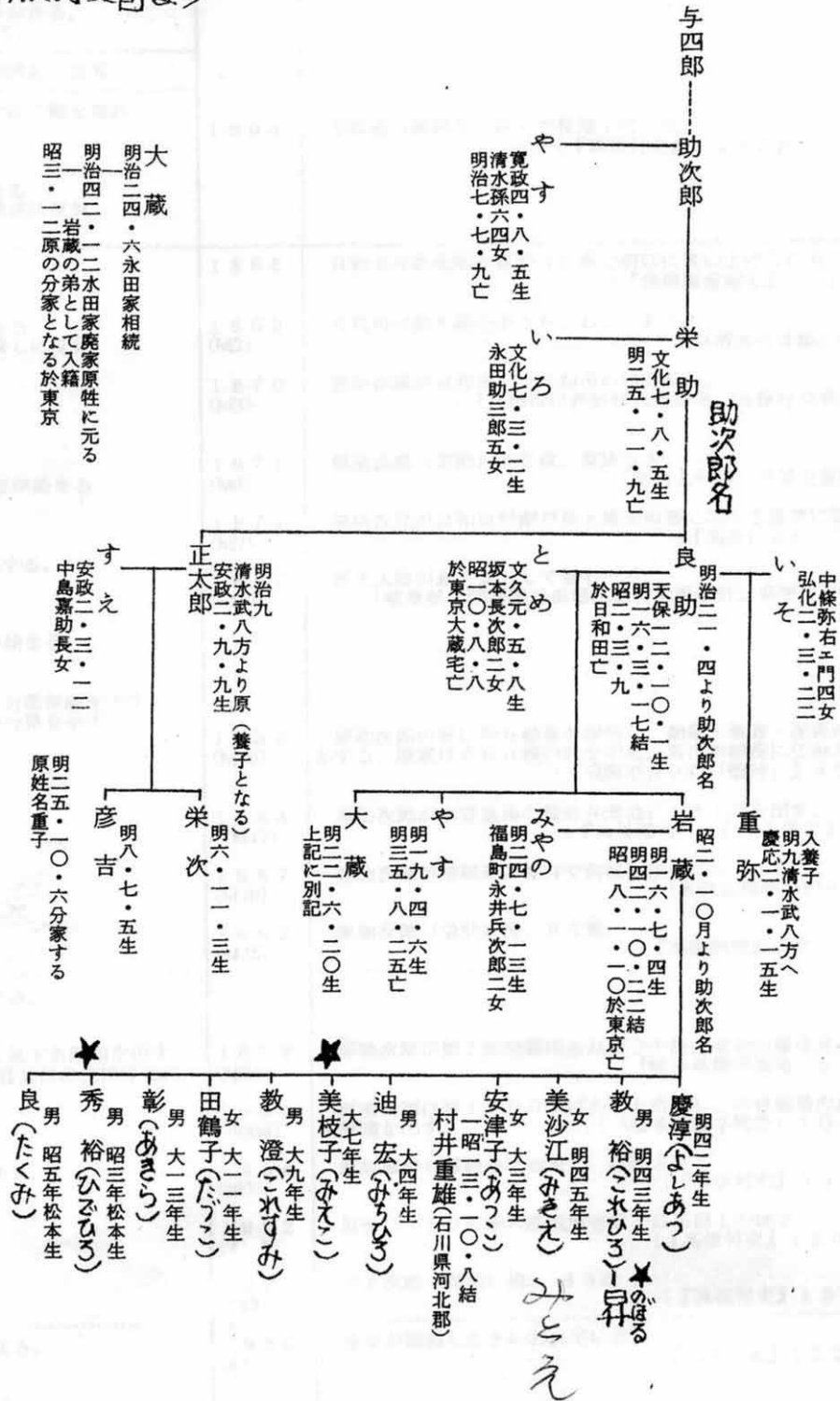
しかし、助次郎さんがなくなって 3 年後には原家は倒産してしまいます。そのいきさつなどははっきりとしないそうです。そして、今日和田にはその家の跡だけが残っています。

その頃に作られた馬頭観世音が今も多く日和田にはあるというわけです。



『高根村史』より

第二章 日和田



くらい大切な感謝の行事だったんだと思います。石仏を見るときには、昔の人のことを思っただけだとよいと思います。昔の生活を理解することで、石仏がいかにか当時の人々の生活の支えになっていたか、いかに人々は祈りを込めていたかということにまで思いがいくのではないのでしょうか。厳しい自然にたえて、この日和田で生活していたことを理解することで、今生きている私たちも、もう一度ふるさとに対する愛着が湧くと思います。

また、石仏にはとてもよい表情があります。「血取場」にあるお釈迦さまは御嶽山がよく見える、とてもいい場所にあり、なおかつ大変いい表情をしています。その他に、石仏を見るときには、この日和田の自然のよさ、景観の素晴らしさも味わうことができます。信仰の対象となっている御嶽山の美しさ、見るところによって表情を変える

奥の深さなどは、石仏をめぐることによって味わえる醍醐味です。また、四季折々の日和田の素晴らしさも味わえます。春の新緑、夏の涼しさ、秋の紅葉。特に秋はふかふかの落ち葉を踏みしめて石仏を巡るとなんともいえない味わいがあります。

このように石仏をめぐることによって、原点にかえることができるよさが味わえます。ぜひこれからもこのよさを伝えていきたいです。

4. 資料





第9章 「米づくり」の社会資源と学習



1. 学校田（旧秋神小学校）

学校田での稲作体験は、旧秋神小学校時代の昭和59年に始まりました。当時の研究指定をきっかけにして、学校の近所の方が所有する田んぼをお借りし、稲作の手ほどきを受けながら始めたのがきっかけです。今もその田んぼを使っています。タカヤマモチというもち米を作っています。

2. 秋神先生

旧秋神小学校時代は、米づくりだけではなく、ほうれん草、大豆、そば、あぶらえ、トマト・・・などありとあらゆる作物作りをしました。それぞれに作り方を教えてください、ふだんの作物管理などをしていただく地域の方々がみえました。その方々を秋神小学校では「秋神先生」と呼んでいました。稲作には多くの秋神先生がみえました。

今では使わなくなった古い機械の使いかたなども教えてください。小学生ができない田んぼの管理の苦労話などもして教えてください。



3. 米作り（八十八の手間）

米作りには大変多くの手間がかかります。しかし、そのすべてを小学生が体験する時間はありません。そのうちのほんの一部だけを体験するのです。

◆①土づくり

米づくりのために稲刈り後の田んぼに堆肥を散布します。

農業の基本は土づくりです。手間がかかりますが欠かせない作業です。

◆②種もみづくり

塩水に種もみを入れて、沈むのがよい種もみです。

ずっしり実のつまった、重い種もみを選びます。これを塩水選と言います。

◆③種まき機・苗代づくり

昔は田んぼの中に苗代を作り、種をまいて育てていました。

今は育苗箱と呼ばれる箱に土を入れて、種をまいたあとは水をかけて消毒してから、うすく土をかぶせて眼が出るのを待ちます。

◆④田植えの準備=田おこし

いよいよ春です。田んぼを耕して水をはったら、土の表面を平らにします。この「しろかき」によって水の深さがそろい、肥料が全体にゆきわたり、水はけも均一になります。稲がむらなく生長できる条件がととのいます。

◆⑤田植え

苗を田んぼに運び、田植えをします。列のあいだは約30cm、株と株のあいだは約15cm。田植え直後は、かよわい苗を風や寒さから守るため水を深めに。9月上旬まで、こまめに水管理が必要です。



◆⑥水管理

田んぼの水はかよわい苗をささえ、風雨や寒さからまもります。寒い日は水を増やします。分けつ後は一週間ほど田を干すなど、細かく水管理することが必要です。

◆⑦稲刈り

刈った稲は「はさ」にかけて天日で乾燥させます。お米の水分を15%くらいにします。



◆⑧脱穀・仕上げ

乾燥させた稲を「はさ」からはずして脱穀します。今は脱穀機を使いますが、昔の「千刃こき」という機械も使わせてもらいました。



⑨精米

脱穀したもみを精米し、写真のような白いお米にします。



4. 小学生の体験学習で学んでほしいこと

(1) 時間がない中ですが、昔からの米づくりに関する問題についても学べる機会があるとよいです。大原騒動など、米に関わって人々が大変な思いをしてきたことを知ることは大切なことだと思います。

(2) 米づくり体験学習は秋神の方々とのふれあいの時間になります。普段から田んぼを管理してくださるときの気持ちなどを聞きながら、地域の人たちと触れ合っ
てほしいと思います。

(3) 田んぼの管理は、とても科学的だし、昔からの知恵も含まれています。米にとっていかに水が大切かもわかります。田んぼの水管理一つとっても、生活と密接に結びついた知恵があります。なかなか時間がなく体験はできませんが知ることは大切です。

田んぼが遠いので、普段から来ることができませんが、途中の経過も観察したりして学習できるといいです。



第10章 「わらび粉づくり」の社会資源と学習



1. わらび粉とは

わらびの根から取ったデンプンを粉にしたもので、別名ハナと言います。わらび粉は、昔は障子貼りなどのノリとして大変重宝され、当時の暮らしを支える貴重な現金収入の1つでした。

質のよいわらび粉はシロバナといわれ、粘着力の強いノリになるため高価でした。現在は、わらび粉はなかなか取れないので大変高価です。

食用としても使われましたが、それは粗くて黒いものでクロバナといわれました。

また、ワラビナワと呼ばれるワラビの根の皮をなつて縄にしたものも売りました。ワラビナワは水に強い丈夫な縄で、重宝がられました。



シロバナ

かつてわらび粉は、高山市朝日町秋神地域や同高根町、飛騨市神岡町山之村などでよく作られました。いずれも山深い寒村です。米があまり作れない土地において、わらび粉は家計を支える大切な収入源であったのです。

ちなみに、現代のわらびもちというのは、わらび粉のデンプンから作ったものは少なく、サツマイモなどから取られたデンプン、あるいは葛粉を材料にして製造したものがほとんどで、本物のわらび粉で作ったわらびもちはめずらしくて高級品となっている。



2. わらび粉と水車

わらび粉を精製するには水車を用いました。根を洗ってつぶし、デンプンを沈殿させるには水車の利用が一番適していました。

秋神地区には、適度な水量と傾斜をもつ谷川があったことと、わらびの根を掘る山が近くにあったため、多くの水車を作りました。

一番多い時には120基ほどもあったそうです。今ではたった1基が残るのみです。それは旧秋神小学校の前に保存されています。

また、秋神にあった水車は高根地区から伝わってきたものであると言われています。わらび粉小屋ではわらび粉の他、米や麦、そば等の穀物の精米や製粉もしていました。



昭和20年頃の秋神地区の水車群

3. わらびと牛馬の放牧と野焼きのサイクル

秋神地区では昔から畜産がさかんで、夏から秋かけて放牧し、冬から春の間は畜舎で飼います。この周辺では牧場とするために山焼きがさかんに行われました。山焼きにて陽当たりをよくした山の斜面の牧場では、わらびが成長します



山焼きするとその後からわらびが育ってくることから、わらびは強い生命力を持っていると言われました。「わら」で「火」をつけて山焼きしたことから「わらの火」＝わらび、と言われる説もあります。

秋神のある地区では、このことを弘法大師様が教えて下さったと言い伝えられ、よくわらびがはえる山に弘法様が祀ってあるところがあります。

ここに放牧された牛馬は、ワラビを摂取すると中毒症状を示すため、牛馬は放牧場のわらびを食べないで雑草だけを食べます。牛馬が歩き回ってわらびの根を切って株分けを進めることになるうえ、放牧地では牛馬の糞が栄養を与えてくれました。その結果、通常より太い根をもったわらびがたくさん育ちました。まるで牛馬がわらびを育てているかのようにになりました。

わらびが成長すると、新たな牧場に牛馬を移します。かつての牧場は「わらび山」となり、人々はわらびの根を掘って、わらび粉づくりに励みました。

4. わらび粉づくり

Q：秋神ではわらび粉はいつ頃作られましたか？

A：戦前から戦後にかけてさかんに作られました。

Q：だれが作っていましたか？

A：主に女性の仕事でした。根を掘ることも、掘った根を運ぶことも大変な重労働した。



Q：一年中作ったのですか？

A：春と秋に、山に小屋をかけます。秋、わらびの茎が枯れるころ、その根を掘りました。製造時には山中にあるこの小屋に住み込んで作業しました。



Q：わらび粉はどうやって作られましたか？

A：①女性たちは朝早くから山に入ってワラビの根を掘りました。

- ↓
- ②水車小屋まで掘った根を運びます。
- ↓
- ③根を水に浸して柔らかくします。
- ↓
- ④谷川の水を利用した水車の力を借りて根を砕きます。
- ↓
- ⑤砕いた根を、大きな木材をくり抜いてつくったフネに入れて
デンプンを沈殿させます。
- ↓
- ⑥フネの底たまった沈殿物を集めて乾燥します。
- ↓
- ⑦乾燥した粉を集めます。



Q：わらび粉作りではどんな工夫がされましたか？

A：少しでも質のよいわらび粉を精製しようと、地域の人たちが講習会を開催して
いました。

5. 社会の変化とわらび粉づくりの変化

わらび粉づくりは大変な労働でした。時代の変化とともに続ける人は少なくなりました。
また、洪水等で多くの水車が一度に破壊されてしまうことがあり、その後人々はわらび粉
水車を離れていきました。わらび粉づくりではない仕事で現金収入を得るようになってい
ったのです。

それとともに、地域にあった水車も古くなったり、都会の人々に買われていったりして、姿を消していきました。

最近、よいわらび粉を含んだわらびの根がとれなくなりました。わらびを毎年のように取っていると、そこにある根にはよいデンプンがたまらなくなるのです。

6. 地域に誇りを

秋神は自然の宝庫です。そして、そこに生きてきた人々の苦勞が、今に生きる私達につながっています。

私は、この地域を本当に誇りに思っています。ですからより多くの人に、そして子ども達にその素晴らしさや、地域の先人達の行き方を伝えたいと思います。

ふるさとのよさをいつまでも忘れることのないようにしてください。

第11章 「天狗まつり」の伝統資源と学習



1. 天狗まつりとは

毎年9月に、秋神の胡桃島神社では天狗まつりが行われます。

この祭りは江戸時代の大飢饉の時に、天狗がこの地に訪れ、野菜や作物を村人たちに授けて生命を救ってくれました。この恩に報いるため、村人たちがこの季節に天狗を野菜で作って奉納するお祭りです。

秋の収穫に対する五穀豊穡の感謝も込めて盛大に開催されます。

2. 天狗まつりのはじまり

いつ頃誰が始めたのかは、はっきりとはわかりません。

しかし、宮の前に住んでいた、物知りのじいちゃんの話によると……。

今から200年ほど前、秋神地方一帯に冷害が起き、害虫も毎年発生して、畑の作物からヒエ・キビに至るまで食い荒らしてその損害はひどく、村は飢饉が続いていました。

こうした夏のある日、御岳から来た行者がこの村を通りかかりました。村の百姓たちは、この飢饉のことを行者に話したところ、行者は次のように教えてくれました。

『お前たちは、山の神や田の神やあらゆる神仏にはおまつりを毎年のごとくしているが、この山に住む天狗様のことを忘れてしまっている。そのため天狗が怒って害を出したのだから、これから二百十日の日に毎年天狗まつりをしてあやまれば、困っている害虫は封じてやる』とのことでした。

この話はすぐに村中に広まり、人々は話し合って「今までは天狗様に何一つおまつりをしていなかったから」とその年から、天狗まつりが始まったといわれています。

まつりは農作物が実る二百十日の頃に行われます。この頃、天狗が風に乗ってやってくると言われています。畑や田でとれたいろいろの野菜で48体の天狗を作ります。人参や大根、茄子、キュウリなどで、天狗や牛、馬、人など、作り手により様々な天狗ができあがります。

夜にその背中に数本ずつローソクを立てて祭壇に並べます。その前列には生朴葉に載せた押し抜き赤飯を供えます。中央上段には天狗さまに鎮座していただきます。

戦前にこの祭りは無くなりかけたことがあったが胡桃島地区では続けられてきた。胡桃島地区では、この日は皆が早めに夕食を済ませます。少し暗くなった午後七時ごろに皆が神社に集まると、社中の灯りが落とされて祭りが始まります。

他地区では、ある家庭に集まったり、祠に集まったりします。



3. 天狗



一般的に山伏の服装で赤ら顔で鼻が高く、翼があり空中を飛翔するとされています。姿は修験者の様相で、その顔は赤く、鼻が高い。このうち、鼻の高いのを「大天狗」、鼻先が尖ったのは「小天狗」あるいは「烏天狗」といいます。



第12章 「野麦を越えた女工たち」の社会資源と学習



1. 野麦峠

野麦峠は、岐阜県高山市と長野県松本市の県境に位置し、飛騨国と信濃国を結ぶ鎌倉街道・江戸街道と呼ばれる街道の峠です。乗鞍岳と鎌ヶ峰の間にあり、標高は1,672mあります。古来から野麦街道があり、能登で取れたブリを飛騨を経由して信州へと運ぶ道筋でした。別名「ブリ街道」とも呼ばれていました。

信州では飛騨ブリとして珍重され、能登では1尾の値段が米1斗であるものが、峠を越えると米1俵になると言われたほどでした。峠付近には、熊笹が多く茂っています。熊笹は50年ぐらいに一度花を咲かせ、稲穂のような実をつけます。これを飛騨では「野麦」と呼び峠の名になりました。

明治36年に設置された一等水準点があります。これは日本一高所にある水準点（1672.29m）です。このことから、当時の主要な交通道であったといえます。



2. 女工さんが通った野麦峠

(1) 時台背景

明治の初めから大正にかけて、生糸は殖産興業当時の主力輸出産業でした。生糸工業で発展していた諏訪地方の岡谷へ、飛騨の女性（多くは10代の少女）が女工として働くためにこの峠を越えました。明治時代の生糸の生産は、当時の輸出総額の3分の1をささえていました。現金収入の少なかった飛騨の農家では、12歳そこそこの娘達が、野麦峠を越えて信州の製糸工場へ「糸ひき女工」として働きに行きました。

そして、大みそかに持ち帰る糸ひきのお金は、飛騨の人々には、なくてはならない大切な収入になっていました。年の暮れから正月にかけての借金を返すためにも、あてにされたお金だったと言われてしています。

(2) 飛騨の女工にとっての野麦峠とお助け小屋

信州へ糸ひき稼ぎに行った飛騨の若い娘達が吹雪の中を命がけで通ったというのが標高1672mの野麦峠です。かつて13歳前後の娘達が列をなしてこの峠を越え、岡谷、諏訪の製糸工場へと向かいました。故郷へ帰る年の暮れには、雪の降り積もる険しい道中で、郷里の親に会うことも出来ず死んでいった娘たちもいます。

そんな雪の峠を越えた工女達が体を休めたのが、お助け小屋です。旅人は疲れた体を休め、クマザサの生い茂る峠を信州へ、飛騨へと下っていきました。現在のお助け小屋は、昭和45年に野麦峠の麓、野麦集落の古い家屋を移築したものです。



3. 女工さんについて

Q：女工さんはどこからきたのですか？

A：今の飛騨市（河合町、神岡町、古川町）を中心に、高山市、地元の高根からも行った人がいます

Q：どれくらいの人が糸ひき稼ぎにいったのでしょうか？

A：ある資料によると、旧山田村（神岡町）では300戸あるうち、560人が行ったとあります。一軒で2，3人行く家もありました。

国府村では、458名（明治43年）行ったとあります。ひとつの村でこれだけの数であるので、飛騨全体では凄い数になると思われませんが、他の地域では当時のそうした記録が残っていないので詳しいことはわかりません。

古川 ↔ 高山 ↔ 美女峠 ↔ 野麦峠 ↔ 塩尻峠 ↔ 岡谷

道のり 約140km

Q：女工さんはどんな仕事をしていたのですか？

A：信州の工場では、わずかの賃金で、しかも1日に13～14時間という長い時間働かされ、病気になっても休ませてもらえないくらい、厳しい生活だったそうです。さらに女工の寄宿舎には逃げ帰ると困るので、鉄のさんがはめられていました。



Q：女工さんはどれくらいのお金をいただけたんですか？

A：14のときから8年間岡谷へ行ったある人は・・・。

1年目10円、2年目は25円、3年目には45円、8年目にはたしか95円もらいました。そのほかに、賞与として1円、2円、3円、5円などを毎

年ちよつとずつもらいました。

1年間働いて100円もらえる人は優秀な人で、100円工女といってました。

Q：当時の百円の価値はどれくらいだったのでしょうか？

A：百円あれば家が建つといわれたほどでした。米一升が、12銭3厘。酒一升が20銭。(明治33年・100銭で1円)

【当時の給与支払い表】

第 冊第 號		大正 3 年 9 月 1 日		信州諏訪郡平野村 笠原製絲所	
第 冊第 號	第 冊第 號	第 冊第 號	第 冊第 號	第 冊第 號	第 冊第 號
右之通り計算相濟候也		差引	拾五圓。六銭	合計金	八拾四圓。五銭
右之通り計算相濟候也		内渡金	七圓。九拾五銭	年皆勤賞	八圓
右之通り計算相濟候也		諸賞金	四圓。五拾五銭	此給金	六拾九圓。五拾銭
右之通り計算相濟候也		夏人工	百八拾八圓。四分	春人工	六拾七圓。八分
右之通り計算相濟候也		夏人工	百八拾八圓。四分	夏人工	百八拾八圓。四分
右之通り計算相濟候也		諸賞金	四圓。五拾五銭	諸賞金	四圓。五拾五銭
右之通り計算相濟候也		年皆勤賞	八圓	年皆勤賞	八圓
右之通り計算相濟候也		合計金	八拾四圓。五銭	合計金	八拾四圓。五銭
右之通り計算相濟候也		内渡金	七圓。九拾五銭	内渡金	七圓。九拾五銭
右之通り計算相濟候也		差引	拾五圓。六銭	差引	拾五圓。六銭
右之通り計算相濟候也		右之通り計算相濟候也		右之通り計算相濟候也	
右之通り計算相濟候也		中井 十 九 殿		中井 十 九 殿	

第 冊第 號		大正 3 年 9 月 1 日		信州諏訪郡平野村 笠原製絲所	
第 冊第 號	第 冊第 號	第 冊第 號	第 冊第 號	第 冊第 號	第 冊第 號
右之通り計算相濟候也		差引	拾四圓。五銭	合計金	七拾九圓。五拾銭
右之通り計算相濟候也		内渡金	六拾八圓。八分	年皆勤賞	七圓
右之通り計算相濟候也		諸賞金	四圓。九拾八銭	此給金	七拾四圓。五銭
右之通り計算相濟候也		夏人工	百六拾六圓。四分	春人工	八拾八圓。八分
右之通り計算相濟候也		夏人工	百六拾六圓。四分	夏人工	百六拾六圓。四分
右之通り計算相濟候也		諸賞金	四圓。九拾八銭	諸賞金	四圓。九拾八銭
右之通り計算相濟候也		年皆勤賞	七圓	年皆勤賞	七圓
右之通り計算相濟候也		合計金	七拾九圓。五拾銭	合計金	七拾九圓。五拾銭
右之通り計算相濟候也		内渡金	六拾八圓。八分	内渡金	六拾八圓。八分
右之通り計算相濟候也		差引	拾四圓。五銭	差引	拾四圓。五銭
右之通り計算相濟候也		右之通り計算相濟候也		右之通り計算相濟候也	
右之通り計算相濟候也		中井 十 九 殿		中井 十 九 殿	

備考	計合	月三		月二		月十		月九		月八		月日
		後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	
杯	人	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	人夫
數	夫	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	本數
		〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	系
		〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	益
		〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	等
		〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	級
		〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	資
		〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	料
		〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	工
		〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	賃
		〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	金
		〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	總
		〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	計
		〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	月

勤
險
は
百
行
の
基

貸
金
之
控

塵
も
積
り
て
山
と
なる

月日	3/7	3/16	3/26	3/31	4/4	4/8	4/11	4/15	4/22	4/29	月日
内	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
渡	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
金	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
額	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
印											
通											
要											
貸											
借											
差											
引											
金											
額											

入
る
を
量
り
て
出
る
を
制
せ
よ

正
直
の
頭
に
神
や
ど
る

月七	月六	月五	月四	月三	月二	月一	月日
後	前	後	前	後	前	後	前
五	三	二	一	七	一	七	人
一	二	二	〇	〇	〇	〇	夫
入	九	一	五	五	二	二	本
〇	九	二	〇	〇	〇	〇	数
一	二						糸
七	七						最
〇	〇						等
二	二						級
二	二						賃
二	二						割
二	二						助
二	二						料
二	二						運
二	二						印
二	二						工
二	二						賃
二	二						金
二	二						錢

油 断 大 敵

成 績 比 較 表

時 は 金 な り

4. 女工さんの別の一面

○当時の女工さんからについてはつらい話ばかりが聞かれます。

- ・野麦峠に雪が降るときは、野麦峠には銭が降ると思って行け。と親に言われた。
- ・女工に行くと言うことはこれで飛騨とも別れるということ。

◇しかし、全てがそうだったというわけではない面もあります。女工哀史では粗悪な食事、長時間労働、低賃金が定説になっていますが、飛騨から行った工女に調査したものによると、食事が悪かった・低賃金だったと答えたものはいなかったそうです。

長時間労働についても苦しかったと答えたのはわずか3%だけで、後の大部分は「それでも家の仕事より楽だった」と答えているそうです。それもそのはず、家にいたらもっと長時間、重労働をしなければ食っていけなかったのが、当時の飛騨の暮らしだったのです。

兄弟の面倒をみなければならない家では、女工には出させてもらえなかったそうです。逆にいえば、女工に行けるのはある意味、恵まれていた面もあった

のです。着ていく服を準備したり、ある程度は余裕もないと出してもらえなかった面もあります。

また、信州や前橋まで出掛けることは当時はなかなかできることでは無かったわけですから、貴重な機会を得たという見方もできます。

女工さんはまぎれもなく、当時の日本の龍興を支えた大切な人々だったので

第Ⅲ部 郷土教育の資料解題

第13章 郷土教育の資料と利用

—高山市朝日地区の郷土教育資料—

I. 郷土についての文献等資料の収集と利用

1. 郷土教育資料と教師の取り組み

学校における授業で、教師が子どもたちを指導するに際しては、学習資料をいかに収集・整理し、それを生かしてどのように効果的な取り組みを構築していくか、ということが課題となる。高山市朝日地区における『郷土教育資料』においては、子どもたちが学習する対象としての朝日地区の学習資源についての資料が、地域の人たちの手によって、新たに書き起こされている。「郷土教育の方法と課題」（篠原論文）では、伝統文化、自然、社会および人的な側面で発掘される地域における学習資源が、教科をはじめ総合的な学習の時間、道徳、特別活動と学校の広範な学習活動に生かされる可能性が示された。

とくに総合的な学習の時間の現場での扱いに見られるように、経験的な学習の内容と方法は、往々として系統的・構造的学習と対峙するものとして、その正当な価値が学習活動の中で認められて位置づけられるということがなかなか困難であった。郷土教育が効果的な教育実践として位置づけられるためには、そこで利用される資料の発掘と整理・分析が重要である。

郷土教育に関して、学校の教師は、地元の出身者を除いては、「よそ者」である。「よそ者」がその土地の学習材を使って子どもに教えるためには、その「よそ者」こそがまず土地の学習材についての理解を深める必要がある。これは、子どもの学習を組織するためにはある程度のことを知っていなければならない、ということの意味するが、それはすべてを知っていなければならないということではなく、教師自身も児童生徒とともに学習することにも十分な可能性がある。

地域の学習材を教育資源化する際に、その前提として、文献等の資料としてすでに整理・分析されているものについての概要を知る必要がある。教師は、これらの既集資料についての知見を深めることで、よりよい学習課題を設定することができるし、子どもたちにとってもそれら多くの地域資料が学習に資するものとして活用できる。教師は異動により入れ替わるため、このような材料の蓄積は、整理・充実されながら継承されていくことが望まれる。

2. 高山市図書館の所蔵資料

以下では、高山市図書館（煥章館、朝日分館、高根分館）での所蔵地域資料調査に基づき、朝日学区における地域資源を扱った文献等資料について整理を行った結果を示す(1)。朝日地区における地域教材に関する文献等資料リストを掲げるとともに、主要な資料について若干の紹介を付した。これらの資料は、教師が朝日地区のことを理解するための基本資料であるとともに、教師の教材作成を助け、資料自体を子どもたちの学習に供される教材とすることもできる。資料リストは、教師の郷土教育実践の参考

資料として活用できるものと考えられる。

煥章館内には、近代文学館が設置されており、その一角には高山に縁の深い近代文学者の作品をはじめ、高山市（合併前の旧町村を含む）の歴史・文化に関する書籍を多数所蔵している。朝日分館、高根分館は、それぞれ高山市役所の朝日支所、高根支所内に設置されており、若干の地域資料を所蔵している。以下の資料リストの文献のほとんどは、煥章館・近代文学館および分館に所蔵されているが、一部分館のみで所蔵しているものもある。文献資料のほか、CD-ROM、DVD による映像資料も所蔵されている。また、朝日村福寿学級で編纂された冊子「かたりべ」のように、村史に使用されている資料でありながら系統的に保存されていないものも見受けられた。今後、朝日地区での資料保存が進められるとよいのではないかと思われる。同時に、ここに掲げたような関連資料については、朝日地区での利用の便が図られる必要がある。図書館には、教師の教材作成支援の役割も期待したい。

3. 郷土教育資料の収集と利用

図書館所蔵資料のほかの学習材として、「野麦峠の館」をはじめとする見学施設における展示資料や実物資料のデータベース化を図るとともに、それ以外の有効な資料類についても系統的・意識的に収集されることが期待される。子どもたちの学習資料としては、ここに挙げるような文献等資料のほか、広く配布されているパンフレットの類の中にも有用なものも多く見受けられる(2)。各種のパンフレットや地域商品のラベル類のようなものについても、一次資料として整理されていくことで、学習のイメージは膨らんでいく可能性がある(3)。

地域資料は、子どもたちの学習に資するよう、「ふるさと学習館」（仮称）（または地域の学習拠点としても活用できる学校図書館）において、学習資源として整理が求められる。これは、高山市図書館分館の地域資料コーナーとも連動するよう発展的に組織し、学校の教育活動や地域の組織とも強い関連性を持たせることが必要となるだろう。

一般に、様々な地域や学校内においても地域資料館に相当する施設を設けているところがあるが、それらには必ずしも十分な配慮がなされているとは言いがたい。地域の人たちから集められた古い道具類などが、学校の空き教室でほこりをかぶっている例は、枚挙に暇がない。とくに学校では、それらの資料の整理や管理を継続的にできる基盤がなく、学習材を有効に活用できる環境を整えることの難しさがある。

近年の読書教育振興への注目から図書館の整備が不可欠なものとして進んでいるように、郷土教育振興のための資料整備は欠かせない。資料の蓄積とその利用の活性化が、学習の効果を上げ、学校と地域の連携を強化する。朝日学区の資料を子どもの郷土教育に役立てるという点では、このような資料施設は学校図書館の一部として設置することが望まれる。元来、学校図書館は文献資料の倉庫ではなく、種々の資料収集に当たるとともに教師の教材作成にも利用され、展示会、研究会、発表会なども行える学習の拠点として機能することが期待されている(4)。子どもの学習の成果なども整理・蓄積されるならば、年度を越えての子どもたちの学習が繋がって、深められていく可能性もある。

すなわち、既存資料の整理・蓄積とその利用をきっかけとして、学習拠点としての資料館・図書館を整備し、さらなる情報収集に取り組みながら、子ども・地域住民・教師が、授業や地域活動、教材作成

などにその場を活用していくことで、郷土教育の振興を図ることができる。資料の収集と整理は、郷土教育を支える条件であると同時に、それ自体がすでに郷土教育の第一歩としての内容を有している。

注

- (1) 調査については、笠井および片山信吾（名城大学）で協力して取り組み、笠井が執筆に当たった。
- (2) 高山南商工会のパンフレット「一ひだ、石仏の里を歩く一日和田高原石仏巡りマップ」（A3判両面）には、日和田地区、小日和田地区、留之原地区の石仏が写真で紹介され、裏面の石仏巡りマップを利用して、それらの石仏をめぐることができるようになっている。財団法人高根村観光開発公社によるパンフレット「岐阜県立自然公園 野麦峠」（A4判両面）は、野麦峠の自然や歴史の魅力を簡潔に示し、散策コース地図が掲載されている。
- (3) 全国の農村部で一次産業により生産される地場商品のラベルデザインを手がける梅原真の仕事などを見ると、地域のいろいろな要素が子どもたちの経済やデザインの学習にも生かせるのではないかということに気づかされる。学習材料は地域の多様なものに広げることができるかもしれない。梅原真『ニッポンの風景をつくりなおせ』（羽鳥書店、2010年）参照。
- (4) 成田康子『みんなでつくろう学校図書館』（岩波ジュニア新書、2012年）参照。近年、学校図書館への注目は高まっており、学校施設の隅に置かれるものでもなく、「椅子に座って静かに本を読む部屋」あるいは「書庫」といった旧来のイメージではない新しい図書館像が見られるようになってきた。

Ⅱ. 朝日学区に関する文献等資料

1. 朝日学区を扱う文献資料

「郷土あさひ」（1980年）と「わたしたちのたかねむら」（1993年）は、旧朝日村、旧高根村の学校で、地域学習の資料として編集されたものである。役場関係者、学校関係者が編集委員となっており、学校の教員も多くの協力をして作成されたと考えられる。郷土教育資料の原型として、村史の子ども学習用教本的な存在となっている。今次の『郷土教育資料』は、この延長上にある資料編纂の仕事といえる。それらの教本の内容は、歴史から産業、民俗にいたるまで、広く村の全容がわかる記述となっている。以下のリスト内には、もくじを示した。旧朝日村、旧高根村について知るには、それぞれの村史が有用である。上記の地域学習資料も村史を参考資料としている。そのほか、村制百年史や広報のまとめなどが刊行されており、各地区の基本情報を得ることができる。村史の参考文献リストからも、郷土教育に資する文献資料を探ることができる。

直接的に朝日地区のことを扱ったこれらの資料に加えて、飛騨地区全般を扱った諸資料のうちから、朝日・高根に関する記述を抽出することができる。たとえば、「ひだびと」に掲載されている「岳麓の村々を歩く」は、『山の民』の作者・江馬修らの手によるもので、朝日・高根のかつての生活の様子がわかる記述が示されている。大型本などにも納められている写真資料は、地域の歴史に残る生活や建物のありさまを伝えている。たとえば、荒垣秀雄・細江光洋の「飛騨一風土と民俗」（1964年）などに

みられる日和田の原家の壮麗なつくりの天井の写真などは、すでに建物が存在しないため、貴重な記録となっている。『斐太後風土記』下巻の「新旧地名対照表」を見ると、朝日村・高根村に合併する以前の、全体を「阿多野郷」と呼ばれた各地区の村名に現在の地区名を見ることができ、当時の村のまとまりが現在の生活地区にも継承されていることがわかる。

2. 朝日学区に関する文献等資料リスト

以下に、朝日学区に関する文献等資料についてのリストを示す。(1)概説、村史等、(2)民俗・交通・歴史等、(3)学校教育関連、(4)DVD、ビデオ、(5)CD-ROM、(6)その他所蔵（国会図書館所蔵）に分類して列挙した。示した項目は、高山市図書館における背ラベル記号（L は館内利用資料を示す）、タイトル、著者、出版者、出版年、ページ数等である。所蔵館について、とくに記入のないものは煥章館で資料を見ることができる。なお、各項目の中では、参考度が高い、扱いやすいと考えられるものから配列したが、学習するテーマによって焦点は異なるので、必ずしも厳密な順序ではない。

子どもたちの学習の中では、『郷土教育資料』や旧村の学習用資料に加えて、それらの資料も適宜利用していくことで、昔から今に至る地域の人々の姿を、より身近に、生き生きと感じ取ることができる。教師は、これらの資料を読み込み、分析・考察することで、児童生徒とともに地域の理解を深め、とくに授業場面でのより効果的な問題設定を行うことも可能になると考えられる。子どもたちがこれらの資料にアクセスできる環境を整え、適切なアドバイスがなされれば、資料は自主的な学習についても発展的に利用できる。

(1)概説、村史等

291.53 ア

タイトル：「郷土あさひ」

著者：朝日村小中学校社会科研究会／編

出版者：朝日村教育委員会

1980年

【ページ数】 176P

もくじ

一、わたしたちの朝日

- (1)朝日に映える村
- (2)龍岩山に立って
- (3)さまざまな四季

二、村のあゆみ

- (1)大昔のようす
- (2)武士の世の中
- (3)朝日村となって

三、農業のくらしと山のしごと

- (1)農業のようす
- (2)馬から牛へ
- (3)山で働く人々

四、商業や工業などのすがた

- (1)店のようす
- (2)村の工業
- (3)商工会

五、水の利用

- (1)朝日ダム
- (2)野中用水
- (3)上水道をひらく

六、交通・通信のうつりかわり

- (1)ひだの街道
- (2)人馬の宿
- (3)荷馬車から自動車へ
- (4)国道三六一号線
- (5)ひろがる通信網

七、村人のくらし

- (1)災害にそなえて
- (2)ゆたかなくらし
- (3)季節のたのしみ
- (4)くらしのくふう

八、これからの朝日村

- (1)ひらけゆく観光
- (2)進みゆく産業
- (3)わたくしたちのねがい

資料

- (1)村人のくらし・祭礼

- 村人のくらし・報恩講
- (2)工業の発達と野麦峠
- (3)満州開拓団
- 学校のうつりかわり

215.3 タ

タイトル：「わたしたちのたかねむら」

著者：高根村教育委員会

1993年03月

【サイズ】26cm 【ページ数】266p

もくじ

一、わたしたちの高根村

- 1 乗鞍と御嶽のある里
 - (1)高根村の位置と地形
 - (2)校下のようす
 - ア 高根小学校下
 - イ 日和田小学校下

- 2 高根村の四季
 - (1)厳しい気候
 - (2)豊かな植物と動物

二、わたしたちのくらし

- 1 村の仕事
 - (1)農家の仕事
 - (2)山林の仕事
 - (3)移動販売車
 - (4)加工場
 - (5)発電所
 - (6)観光
- 2 安全な暮らし
 - (1)地域の防火施設
 - (2)消防団のしくみ
 - (3)交通安全
- 3 豊かな暮らし
 - (1)公民館活動
 - (2)体育活動
 - (3)保険・医療
 - (4)環境衛生

三、高根村の歩み

- 1 村の行政の歩み
- 2 村の暮らしと歩み
 - (1)世帯と人口
 - (2)衣服
 - (3)食事
 - (4)燃料
 - (5)電気
 - (6)生活の道具
 - (7)住居
 - (8)医療
 - (9)道路
 - (10)物の運搬
 - (11)旅館
 - (12)通信
 - (13)商業

- (14)工業
- (15)鉱山
- (16)農業

焼畑、開拓、稲作、ひえ、そば、大豆、大麦、小麦、いも類、麻布織り、畜産（馬・牛・その他）、養蚕
- (17)山林
- (18)山の仕事
- (19)わらび粉づくり（すじ縄）
- (20)川魚
- (21)観光
- 3 学校の歩み
- 4 電源開発
 - (1)調査から工事の開始まで
 - (2)工事のようす
 - (3)工事中の村のようす
 - (4)水没と補償

215.3 ア 1

タイトル：「朝日村史 第1巻」

著者：朝日村誌編纂委員会／編集

各巻書名：原始 1

各巻書名：古代

各巻書名：中世

各巻書名：近世

出版者：朝日村（岐阜県）：朝日村

1997年11月

【サイズ】22cm

215.3 ア 2

タイトル：「朝日村史 第2巻」

著者：朝日村誌編纂委員会／編集

各巻書名：近世 2

出版者：朝日村（岐阜県）：朝日村

1998年02月

【サイズ】22cm

215.3 ア 3

タイトル：「朝日村史 第3巻」

著者：朝日村誌編纂委員会

各巻書名：近代

出版者：朝日村

2005年01月

【サイズ】22cm 【ページ数】1242,
116p

215.3ア4

タイトル:「朝日村史 第4巻」
著者:朝日村誌編纂委員会
各巻書名:現代
出版者:朝日村
2005年01月

【サイズ】22cm 【ページ数】1304,
11p

215.3ア5

タイトル:「朝日村史 第5巻」
著者:朝日村誌編纂委員会
各巻書名:民俗・伝承
出版者:朝日村
2005年01月

【サイズ】22cm 【ページ数】447p

215.3タ

タイトル:「高根村史」
著者:高根村史編集委員会/編集
出版者:〔高根村(岐阜県)〕:高根村
1984年
【サイズ】22cm 【ページ数】1405
p 図版16p

215.3タ

タイトル:「村のあゆみ」
サブタイトル:広報が語る 高根村38年の歴史
著者:高根村教育委員会
出版者:高根村(飛騨) 高根村
2005年01月
【サイズ】30cm 【ページ数】124p

【件名】広報たかね

L215.3ア

タイトル:「朝日村のあゆみ」
サブタイトル:村制百年記念誌
出版者:朝日村
1976年05月

【サイズ】31cm 【ページ数】62p

L215.3ア(朝日分館には記号なしで配架)

タイトル:「あさひ」
サブタイトル:緑とこだまの里 朝日村百年
記念要覧
出版者:朝日村(岐阜県):岐阜県大野郡朝
日村
1988年11月
【サイズ】30cm 【ページ数】38p
【一般注記】年表:P10~29

(2)民俗・交通・歴史等

L215.3ヒ

タイトル:「日和田紀要」
出版者:高根村(岐阜) 大野郡高根村教
育委員会
1970年
1.はじめに
2.高根村及び日和田の概略
3.住居について
4.昔の生活
5.服飾について
6.食物について
7.社会生活について
8.交通及び運搬について
9.年中行事について
10.産業について
11.林業について
12.日和田の畜産について
13.日和田部落家庭における文化施設概況
14.馬大尽の原家について
15.天然記念物・名所及び伝説
16.日和田に関する調査物について
17.日和田の現状と将来について

18.むすび

382.1 ア

タイトル：「飛驒」

サブタイトル：風土と民俗

著者：荒垣秀雄／文、細江光洋／写真

出版者：東京：朝日新聞社

1964年

【サイズ】22cm 【ページ数】240p

p.29 日和田の田植え

p.46 高根村上カ洞 牛の野休み

p.72 日和田 原家の漆塗りの格天井

p.73 笠天井（同上、中央は朱塗り）

p.96 穫入れには妊婦も出勤（日和田）

p.97 神棚に新粉を飾る（日和田）

p.106 嫁とりの季節（日和田）

382.1 ヒ 10

タイトル：「ひだびと 第10巻」

著者：飛驒考古土俗学会／著

出版者：歴史図書社レキソソシヤ

1979年

【サイズ】22

第七年

第一号 p.29- 上町利一「朝日村秋神のわらび粉」

第二号 p.38- 上町利一「朝日村秋神のわらび粉（二）」

第五号 岳麓の村々を歩く『山の民』第三部の主要な舞台
＝益田郡高根村、朝日村（表紙＝秋神の人々）

p.8 江馬修 まへがき

p.9 江馬三枝子 美女峠をこえて秋神へ

p.22 村田祐作 秋神から上ヶ洞へ

p.32 瀬川良三 高根の村々

382.1 ヒ 8

タイトル：「ひだびと 第8巻」

著者：飛驒考古土俗学会／著

出版者：歴史図書社

1979年

【サイズ】22 【ページ数】1サツ

第六年

第二号 p.9- 竹内利美 高根村日和田探訪記

L 384.3 ト

タイトル：「峠路をゆく人々」

サブタイトル：山村の交易・交通と運搬

著者：山村民俗の会／編

叢書名：シリーズ山と民俗 3

出版者：東京：エンタプライズ

東京：産学社

1990年08月

【サイズ】20cm 【ページ数】233p

長澤武「北アルプス・歴史の峠路」p.129～

pp.132-135 野麦峠路

388.1 コ

タイトル：「飛驒の伝説」

著者：小島 千代蔵／著

出版者：高山：小島 千代蔵

1968年04月

【サイズ】19cm 【ページ数】205p

一九、柚が池（大野郡高根村日和田）p.46-

六九、日和田村民の転宗（大野郡高根村日和田）p.145-

【真宗→禅宗】

七七、鼠が熊を食う（大野郡朝日村青屋）p.161-

L 388.1 コ

タイトル：「わたしたちの岐阜県の伝説」

著者：後藤 時男／文、平光 明彦／絵

出版者：岐阜 大衆書房

1972年

【サイズ】22 【ページ数】191P

p.167- 八八、雨ごいと一升だる（高根村）（柚ヶ池の竜神）

p.169- 八九、野麦という名前（高根村）

388.1 ミ

タイトル：「私たちの調べた野麦街道の民話」

著者：征矢野 宏／編著、細川 修／編著

出版者：松本：たつのこ出版

1981年

【サイズ】26cm 【ページ数】255p

注 記

【一般注記】背の書名：野麦街道の民話 採集：長野県
松本美須々ヶ丘高校文芸クラブ

215.3 ホ

タイトル：「保存版飛騨の今昔」

サブタイトル：高山市・下呂市・飛騨市・
白川村

著者：道下 亨／編者

出版者：松本：郷土出版社

2006年11月

【サイズ】37cm 【ページ数】147p

- p.54 朝日村 昭和30年代 わらび根を背負う女性たち
朝日村 昭和40年代 養蚕に励む人々
- p.55 高根村 昭和30年代 千町牧場
朝日村 昭和30年代 甲の牛市
- p.59 朝日村 昭和47年頃 民宿ブームの頃
- p.61 朝日村 昭和40年頃 菜洗い
- p.62 朝日村 昭和30年代 天狗まつりの準備
- p.63 高根村 昭和29年 高根中学校での出初式
(建物)
- p.74 高根村 昭和30年代 木造だった頃の高根村役場
平成4年 役場あとにJAひだ大野農協高根支店
村民センター(昭和52.8設置)を一部改築して、平成15
年10月村役場入居
- p.75 高根村 昭和30年代 上ヶ洞に初めて開設された
高根診療所(昭和22年開設、大野医師(女性)昭和25
年着任)
- p.76 朝日村 昭和40年代 モダンだった朝日村役場
(街並み)
- p.97 高根村 昭和30年代 上ヶ洞内の道後神社付近
- p.112 高根村 昭和30年代 道後神社の例祭
- p.113 朝日村 昭和30年代 万石の八幡神社例祭
- p.126 高根小学校 昭和42年、平成18年
- p.127 朝日小学校 大正8年、昭和30年、昭和45年、
平成18年
- p.140 昭和30年代 万石八幡神社での季節保育所

215.3 ヒ

タイトル：「ひだびとのあしあと」

著者：飛騨教育史学研究会／編著

出版者：岐阜：岐阜新聞社出版局

1999年08月

【サイズ】22cm 【ページ数】192p

縄文時代から現代まで、郷土の歴史を見つめることで、「ひ
だびと」の残した手技や、脈々と伝えられる魂を伝える。
1997年3月から1999年1月まで『岐阜新聞』に連載さ
れたコーナーを一冊にまとめたもの。

pp.24-25 馬大尽の原助次郎 高根村(中野谷康司)

pp.38-39 赤い耕運機が変えた飛騨の農業 朝日村(田中
彰)

pp.104-105 乗鞍登山道を切り開いた上牧太郎之助 朝
日村(平田昭彦)

069.0 ヒ

タイトル：「ひだの散歩道 創刊号～第22
号」

著者：「ひだの散歩道」編集委員会／編集

出版者：高山：飛騨地域活性化推進協議会
事務局

2002年04月

【サイズ】30cm

【一般注記】岐阜県ミュージアムひだ 飛
騨・世界生活文化センター

682.1 テ

タイトル：「定本鰯街道」

サブタイトル：その歴史と文化

著者：市川 健夫、北林 吉弘、菅田 一
衛／編集委員

出版者：松本：郷土出版社

1999年11月

【サイズ】31cm 【ページ数】221p

(p.155、p.164) 野麦街道、(p.170) 高根村野麦工女宿

291.53 タ

タイトル：「飛騨の絵本」

サブタイトル：田草川譲紀行写真集

著者：田草川 譲／著

出版者：三鷹：けやき書房

1990年04月

【サイズ】27cm 【ページ数】111p

388.1 ミ

タイトル：「美濃と飛騨のむかし話」

著者：岐阜県小中学校長会／編

出版者：岐阜：岐阜県校長会館

1981年07月

【サイズ】21cm 【ページ数】283p

「杣が池とちんまが池」所収

388.1ミ2

タイトル：「美濃と飛騨のむかし話 続」

著者：岐阜県小中学校長会／編

出版者：岐阜：岐阜県校長会館事業部

1970年

【サイズ】21cm 【ページ数】327p

L914.6キ

タイトル：「続・旅の風景」

著者：北島 修一郎 著

出版者：北島修一郎

2001年06月

【サイズ】20×14 【ページ数】327

P

- 1 ああ野麦峠いま観光地に
- 2 過疎化の飛騨高根村とダム
- 3 ふる里創生に尽力する高根村
- 4 飛騨の出稼ぎ・女工哀史
- 5 日本一のかがり火まつり
- 6 合掌の村・岐阜の白川郷

388.1ヒ

タイトル：「飛騨の民話・唄・遊び」

サブタイトル：岐阜県朝日村・高根村の伝承

著者：鶴野 祐介、大橋 和華、石川 稔子／編著

出版者 岡山：手帖舎

1999年03月

【サイズ】21cm 【ページ数】313p

(朝日分館に記号なしで配架)

朝日村福寿学級「かたりべ」

全巻ではない。平成10年3月で第9集。「かたりべ」は一部の内容が村史に掲載されている)

291.08ヒ1

タイトル：「斐太後風土記 第1巻」

叢書名：飛騨叢書 第四編

各巻書名：大日本地誌大系

各巻著者：蘆田 伊人 編

出版者：雄山閣

1972年

【サイズ】22 【ページ数】423P

291.08ヒ2

タイトル：「斐太後風土記 第2巻」

叢書名：飛騨叢書 第五編

各巻書名：大日本地誌大系

各巻著者：蘆田 伊人 編

出版者：雄山閣

1972年

【サイズ】22cm 【ページ数】347p

611.2ギ

タイトル：「岐阜県満洲開拓史」

著者：岐阜県開拓自興会／編

出版者：岐阜県開拓自興会

1977年10月

【サイズ】27cm 【ページ数】876p

916ト

タイトル：「遠のく曠野の空」

著者：岐阜県開拓自興会朝日支部／編

叢書名：岐阜県渾春朝日開拓団回顧録

出版者：岐阜県大野郡朝日村役場

1982年

【サイズ】22 【ページ数】453P

175.9ヒ

タイトル：「飛騨の慰霊碑」

著者：飛騨護国神社

2003年03月

【ページ数】170P

p.85 朝日村西洞法正寺境内 日露戦役忠魂碑

p.86 朝日村万石小学校跡 英霊碑

p.87 朝日村見座金峰神社内 護国神社

p.88 甲田城寺境内 満州開拓物故者之碑

p.89 高根村上ヶ洞大徳寺境内 英霊碑

p.90 高根村上ヶ洞大徳寺境内 日清日露戦争忠魂碑

(3)学校教育関連

376.2 タ

タイトル：「高根小学校閉校記念誌」

サブタイトル：乗鞍さん 御岳さん ありがとう

著者：高根小学校閉校記念事業実行委員会記念誌委員会／編

出版者：高山：記念事業実行委員会記念誌委員会

2007年03月

【サイズ】30cm 【ページ数】279p

L611.2 ヒ

タイトル：「日和田富士」

著者：日和田中学校記念事業実行委員会／編

叢書名：四十五年の歩み

出版者：日和田中学校PTA

1993年

【サイズ】27 【ページ数】103P

L376.3 チ

タイトル：「中学校20年の歩み」

著者：岐阜県中学校長会／編

出版者：岐阜 岐阜県中学校長会

1968年

【サイズ】22 【ページ数】272P

p.241 朝日中学校

p.242 高根中学校

L370.7 オ

タイトル：「大野郡教育研究所 閉所式」

出版者：〔高山〕：大野郡教育研究所

2004年

【サイズ】30cm 【ページ数】15p

370.5 オ

タイトル：「大野の教育」〔記念誌〕

出版者：大野の教育発刊実行委員会

2004年12月

【サイズ】31cm 【ページ数】283p

370.5 オ

タイトル：「大野の教育 五十年誌」

出版者：大野郡教育会

1995年03月

【サイズ】27cm 【ページ数】277p

〔以下の2点を含む〕

「大野郡教育会沿革史」S.54.3.20

「大野郡教組のあゆみ—17年—」大野郡教組史編集委員会、1963年4月発行

L370.7 ケ84

タイトル：「研究のまとめ 昭和59年度」

サブタイトル：教育振興会助成

出版者：大野郡教育会

1985年

【サイズ】26cm

丹羽宏「御岳山麓 日和田の野鳥」

L370.7 ケ85

タイトル：「研究のまとめ 昭和60年度」

サブタイトル：教育振興会助成

出版者：大野郡教育会

1986年

【サイズ】26cm

L 376.2 ア (高根分館のみ所蔵)

タイトル:「新しい朝日小学校」

サブタイトル: 4校統合記念誌

出版者: 高山: 高山市立朝日小学校

2009年03月

【サイズ】30cm 【ページ数】31p

(4)DVD、ビデオ

D 291 タ

タイトル:「高根村わが故郷」

サブタイトル: 高根村閉村記念 平成17年1月31日

アーティスト: 岐阜県高根村/企画

2005年

【サイズ】12cm 【ページ数】95分

1 高根村わが故郷

2 高根村のまつり

3 飛騨 高根村

4 高根村閉村記念 平成17年1月31日

D 767 ナ

タイトル:「懐かしの朝日小・中 校歌 校舎」

アーティスト: 高山市立朝日中学校/唄

【サイズ】12cm 【ページ数】51分

1 龍巖太鼓

2 日和田小中学校校歌

3 高根中学校校歌

4 秋神中学校校歌

5 朝日中学校校歌

6 ジェリコの戦い

7 大地讃頌

8 地球星歌

9 ロコモーション

10 ふるさと

11 ふるさと

12 道

13 カントリー・ロード

14 道

15 チェリー

D 291 ア 4

タイトル:「アトラス飛騨 高山市 4」

サブタイトル: 飛騨地域紹介映像

朝日町、高根町

アーティスト: 岐阜県ミュージアムひだ/

企画

岐阜県/著作

出版者: 飛騨地域活性化推進協議会

2009年02月

【サイズ】12cm 【ページ数】56分

注 記

【一般注記】利用範囲: 上映・館内・外

内容紹介: 本編中の市町村名の表記は、制作当時のものです。

1 飛騨地域紹介映像

2 朝日町

3 高根町

4 朝日小学校

5 美女餅

6 よもぎうどん

7 高冷地野菜 トマトジャム

8 枝垂れ桜

9 氷点下の森

10 七本サワラ

11 胡桃島キャンプ場

12 復活! 乗鞍青屋登山道

13 春の野麦峠

14 柚ヶ池、ちんまが池

15 メルヘンどんぐり

16 青氷の滝

17 なんぼんの里

18 日本一かがり火まつり

19 日和田の祭り

20 千町牧場

21 石仏のひとり言~石仏の里・高根~

V 386 ヒ

タイトル:「日和田の三つ重ね」

サブタイトル: 小日和田・日和田の祭礼と民謡

アーティスト: 高山市教育委員会/制作

2005年

【媒体区分】VHS 【ページ数】30分

D 386 ヒ

タイトル:「日和田の三つ重ね」

アーティスト：高山市教育委員会／制作
【媒体区分】DVD【サイズ】12cm【ページ数】30分

注 記

- 1 小日和田の祭り
- 2 めでた
- 3 輪島
- 4 追分
- 5 日和田の祭り
- 6 めでた
- 7 輪島
- 8 追分

- 9 おしゃれ (9号)
- 10 活躍する女性 (10号)
- 11 災害から復興へ (11号)
- 12 冬をあそぶ (12号)
- 13 春の風流 (13号)
- 14 健康をねがう (14号)
- 15 峠と街道 (15号)
- 16 食と水 (16号)
- 17 石ものがたり (17号)
- 18 木 (18号)
- 19 野菜 (19号)
- 20 火・炎 (20号)
- 21 菓子・こまぐち (21号)
- 22 山とひだびと (22号)

(5)CD-ROM

CR 031 タ

タイトル：「高山市ふるさと伝承電子図鑑」

アーティスト：高山市教育委員会

出版者：高山市教育委員会

1998年

CR 069 ヒ

タイトル：ひだの散歩道 総集編

アーティスト：岐阜県ミュージアムひだ

飛騨地域活性化推進協議会

- 1 ひだの冬支度・祭礼 (創刊号)
- 2 春が来た (2号)
- 3 飛騨のふしぎ (3号)
- 4 冬の暮らし (4号)
- 5 飛騨の学校給食 (5号)
- 6 ひだの夏 (6号)
- 7 手～特別企画展「手」～ (7号)
- 8 縄文～食の1万年～ (8号)

(6)その他所蔵 (国会図書館所蔵)

タイトル：「朝日村(岐阜県大野郡)航空写真集」

シリーズ名：空の散歩シリーズ

出版社：たつのこ出版

1979年

タイトル：「斐太の路芝」

著者：柿元一兵編

出版社：原資料の出版事項：岐阜県山林会
大野益田吉城郡支部 1909年

注記：原資料の形態事項：41p 24cm

おわりに

郷土教育の推進を中心に地方農山村の小規模校の学校の活性化の方法と課題を検討した。

しかし、ここで検討したことはあくまでも構想の案であり、リアルな実践の案ではない。実際には、現場の朝日小学校の校長先生や先生たちがどこまでこの案と向き合い、検討し、次年度以降バージョン・アップした郷土教育の実践を展開できるかがすべてであると考えられる。その意味では、朝日小学校の校長先生と先生たちによる郷土教育のカリキュラム開発の意欲と努力に期待したい。

一方、この郷土教育は学校の活性化のためのみではなく、地域・朝日地域の活性化のためのものである。多くの朝日の人たち（保護者）は地域の資源を保護し、子どもたちに伝承し、子どもたちにふるさととしての朝日を愛する心を持ってほしいと願っている。将来、朝日を離れていく子どもたちは確実に郷土としての朝日から学んだことと心をもち成長する。その意味では、郷土は一人の人間の成長に関与する価値の土壌を意味するといえる。それは、当然に朝日の人たち（保護者）の願いでもある。朝日小学校はその願いに応える義務と責任がある。

また、この郷土教育推進案は朝日小学校に限定されたものではない。同一の学区をもつ朝日中学校や高山市内の同じ条件の農山村型の小規模校にも汎用できる可能性がある。将来的に、この郷土教育推進案が朝日小学校の開発実践を通じて開発モデル案となり、多くの学校に適用されることを願っている。

最後に、本書に執筆をいただいた朝日の郷土資源の関係者の方々に感謝したい。郷土資源を愛し、その価値を子どもたちに伝えたいという思いに敬意を表したい。また、本書の作成に関してさまざまな形でご指導とご支援をいただいた高山市教育研究所主幹・三橋浩之先生に感謝したい。相当にご苦勞をおかけした。さらに、本書の作成をサポートしていただいた笠井尚先生（中部大学教授）、片山信吾先生（名城大学准教授）にも感謝したい。有益なご助言をいただいた。

平成 24 年 2 月 25 日

篠原 清昭

（岐阜大学大学院教育学研究科教授）

執筆者一覧（分担）

- 篠原 清昭（岐阜大学、第1章、第2章）
山岩 豪（無印良品、第3章）
市原 秀久（道の駅「飛騨たかね工房」、第4章）
山本 大介（道の駅「ひだ朝日」、第5章）
NPO法人ワイワイケー（第6章）
下田 初秋（第7章）
小坂 守（第8章）
佐合 辰旭（第9章）
小林 繁（秋神温泉、第10章、第11章）
中井 満（第12章）
笠井 尚（中部大学、第13章）

社会教育による地域の教育力強化プロジェクト

学校と地域の総合的な活性化
—朝日学区の郷土教育と郷土資源—

発行 岐阜大学
岐阜市柳戸 1-1 岐阜大学教職大学院
058-293-2329 sinohara@gifu-u.ac.jp
